
紅蓮の宝戒

果無 真人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅蓮の宝戒

【Nコード】

N6361K

【作者名】

果無 真人

【あらすじ】

高校一年生の高遠隼也は退屈だった。この、作られた世界に。しかし、そんな日常もある少女が現われたことによって激変する。

一人の少女の死

一人の少女の赤

一人の少女の暴言

一人の女性の暴露、宣告

そして少年の世界は動きだす。

改訂している場合が多々ありますが、ほとんど誤字脱字のみの修正です。内容には変更ありません。すみません。

紅の使者？

もしもこの世が地獄ならば天国はどこにあるというのだ。

本当は天国も地獄も全てこの世のことなのだろう。

私たちは選択できる。

この世を天国にするか地獄にするか。

全ての人間がその世界を同じように感じるかどうかは別問題だけれど。

とある夏休み前の昼下がり。青い空、白い雲。空を占める雲の割合が大体のところ4割くらいなので、天候は晴れ。

この学校の屋上は、来訪者が少ない。4月当初は屋上という、青春舞台の代表に興味本位で訪れる1年が結構いる。しかし、何分位置が悪い。この学校は、教室が建物の東側に集合しているのだが、屋上へ向かうには正反対の方角にある西階段を3階まで上り、さらに渡り廊下を通り、また1階分階段を上らなければならない。それから、日当たりが悪くて、寒い。この学校は県内では中堅より少し賢い評価を頂いているだけあって、そういった輩は皆無だが、盗んだバイクで走りだしたくなる「やんごとなき」お子様も立ち寄らないはずである。メリツトが無い。

しかし、どこの学校、学年、もしくはクラスに異端児が一人はいるように、今、この屋上には男子学生が座っていた。アップテンポな音楽を聴きながら、握り飯を頬張っている。傍から観察すると、友人皆無のいじめられっ子が一人悲しく食事しているようにも見える。

少年は食事終了後、屋上の床に寝ころび、青空を5秒眺めてから、5分後に携帯のアラームが鳴るまで昼寝をした。携帯のアラームが鳴ると少年はゆっくりと身を起こし、昼食のゴミが入ったビニ

ル袋を持ち、屋上を後にしようとしてドアに向かった。が、
「うぐっ」

少年がドアのノブに手をかけようとしたその時、ドアが勢いよく彼に攻撃してきた。そのスピードに避ける術はなく、彼の額は50のダメージを受け、その場に倒れこんだ。

「うわー！ごめんなさい！？」

彼が上方向に目をやるとボブカットの女子がいた。体型はか細いというわけではないが、中肉中背、スカート丈は膝より2センチほど上、このような、ごく普通の女子が先ほどの攻撃の仕掛人だとは彼も予想外だったであろう。

「ごめんなさい！この屋上に人がいるとは思わなかったから！もうすぐ昼休み終わりだったし、なおさら！」

「…いいえ、大丈夫です。」

少年は少女の言い訳に対して怒るわけではなく、落ち着き払った様子で対応した。

「本当ごめんなさい！血出てない！？」

申し訳なさそうにしている少女が差し出した手をつかみ、少年は立ち上がった。

「はい、多分出血はしてないですけど…」

「？なにかおかしいところが？」

少年は心配そうな少女の顔を2秒見た後、「いや、なんでもないので」と言っ、屋上を後にした。

「シユン、また屋上 رفتったのかあ？」

隼也が教室に戻ると一人の男子学生が声をかけてきた。

「ああ」

「お前も物好きだねえ。わざわざ、あんな陰気臭い所で昼食なんて…ん？おでこが赤い。うてか、赤黒くなってるけどどうした？」

男子学生は隼也のおでこの損傷具合を見て、怪訝な顔をした。確かに、普通に昼食を食べるだけではおでこに攻撃は受けられないだろう。

「なあ、タケ」

しばらく…といても3秒ほどだが、考え込んだ後、隼也は向かいにいる法武の顔を見ながら伺った。

「なんだ？」

「もうすぐ、午後の授業が始まるっていうのに、その5分前に屋上に来るっていうのはどういう了見だろう？」

しばしの沈黙。そして、その後、法武はパーマがかかった茶髪をいじりながら答えた。

「それは…サボりだろ」

「ですよー、と隼也は小さく答えた。

そして、普段となんら変わらない午後が過ぎ、その日は終了した。

朝だ。朝が来た。昨日に引き続き、天候は晴れ。

「シユンヤくうーん!!」

教室のドアを開けた隼也を待っていたのは同級生の全然うれしくない暑苦しい抱擁だった。

「うげっ、なんだ！タケ！離せ！俺にそんな趣味はない！」

「いいから聞けっつてえ！シユン！」

法武は隼也の肩に腕を回し上機嫌に答えた。

「今日は転校生が来るらしい！」

「…へえ」

「しかも、女子！」

「…ほう」

しばしの沈黙。法武の眉間にだんだん皺が増えていく。

「あー！！もうっ！なんだ！そのローテンション！無関心！クールな俺かつこいい！みたいな感じ！！」

友人の反応の薄さに不満があつたらしい。

「いや、俺も普通にそれなりに興味はあるよ。だけど、目の前にハイテンションすぎる奴がいると、とてもテンション下がる。残念だ。

全てお前のせいだ・タケ」

「そんな冷たいこと言うなよ…俺が悪かったよ、だから俺の話聞いてください。お願いします。」

友人の意見に少し傷ついたらしい。腰が低くなった。

「…しょうがないな。ほら、言ってみる。お前が転校生に対してどんなロマンを持つてるかを言ってみる。聞いていてやるから。」

ありがとうございます、と法武は深々とお辞儀をした。

「転校生といえば、やはり恋愛的なイベントが望めるだろ？」

先ほどの控えめな態度はどこへやら。5分後にはもうハイテンション法武になっていた。

隼也是そんな級友の話をたいして興味もなさそうに聞いていた。

「俺的には、清纯そうな女の子が良いなあ。って思うわけ！なんかこう、儂げな！守ってあげたくなるような！髪型は肩に届くか届かないかくらいで！ストレートで！もちろん、黒髪でお願いします！」

「え、お前まだ顔見てないの？」

「今日まだ学校来てないみたいなんだよなあ。先生慌てていたし、俺、職員室前で騒がしくしているのを見て、初めて転校生来るって知ったし。」

清纯そうな転校生は転校初日に遅刻してこない…、と思いつつも友人の夢を壊すまいと隼也是そのことを口にしなかった。

「ええつと、誰か知っているかもしれないが、今日は転校生が来ます。」

朝の連絡時間になり、白髪交じりの男性担任が言葉を発した。その顔には少し疲労感が垣間見える。

担任の発表を聞いて教室にはどよめきが起きた。そして一人の男子生徒が、

「先生！さ、早く入ってきてもらってください！」

と転校生入場を促した。その発言に対し、担任は困ったような顔を

し、続けて言葉を発した。

「ああー、そのう、だな。まだ…来てないといえますか」

「え？」

「まだ来てないのかよ…」

担任の発言に少々困惑している空間の中、隼也は呆れながら独り言を呟いた。

その時だった。ダンッダンッと廊下を駆け抜けるような音が響いた。そして

ガラガラッ！

「すみません！遅れましたあ！転校生の佐屋宗智生さやむねとまおです！よろしくう！」

現われたのは法武の理想とは180。反対の赤髪ショートカット、ミニスカートにハーフパンツ、ジャージを羽織った明朗活発な女子だった。

朝のHR終了後、隼也は前の席にいる、理想が儂く崩れ去った友人を軽く慰めた後、隣の席を見やった。佐屋宗智生は隼也の隣の席に座っていた。窓際の佐屋宗の席は日当たりも良く、なかなかの良席と言ってもいい。転校生の初日は好奇心旺盛なクラスメイトが席の周りに集って質問攻め、というイメージがあるが、佐屋宗の場合も例外ではなかった。教室に現れた時の陽気なイメージがクラスメイトにとっては好印象につながったのだらう。教師はどうかはおいしい。

佐屋宗智生は最初の印象に違わず、明るい女子だった。さまざまな生徒の質問にも笑顔で答え、さらに逆に質問を返す、等のコミュニケーション上級テクニクも駆使できていた。

「ねえ、どこから来たの？」

「えーつとね、香川だよ」

「お父さんの仕事関係で引越してきたのかな？」

「いや、この土地に来てみたかったから引越してきたんだ」

なにそれー本当？と他愛もない話をしている。平和だ。つい先ほど落ち込んでいた法武もいつのまにか佐屋宗と気軽に会話していた。

「佐屋宗は何で赤く染めてるの？似合ってるけど」

実際、髪を染めるのに大した理由はないだろう。大半が好奇心からだ。なんという、しょうも無い質問をしているのか、我が友人ながら呆れる。といった顔で隼也は法武を見ていた。しかし、佐屋宗の答えた内容は予想外のものではあった。

「これはねえ、遺伝なのだよ。ウチの家系は殆ど赤」

「遺伝？うそっ！カツコいいな！」

法武の羨望のまなざしを受け、佐屋宗はさらになっこり微笑んだ。

「ありがとうー。タケは染めてるの？タケもかつこいいよ」

明らかにお世辞だとわかるその言葉に、にやついた法武の顔を見て隼也はフウツとため息をこぼしたところで授業が始まるチャイムが校内に響いた。

「こんにちはー」

昼下がり。隼也は屋上で昼食を食べていた。普段は隼也以外、この屋上にいる者はいない。しかし、今日は

「あの、昨日のお詫びをしたくて、今日もこの時間にここにいるかな、と思ったの」

隼也の傍には昨日ドアで攻撃してきた少女が立っていた。そして、少女はビニル袋を隼也に渡した。

隼也が袋の中をのぞくと菓子パンが3個入っていた。

「別に気にしなくてもいいのに…」

「気にしちゃいますよ！だって思いつきりぶつけてしまったのだし

…頭大丈夫？」

その言い回しは誤解を招く恐れがある。しかし、隼也はそこには突っ込まなかった。

「じゃあ、もらっとく」

「うん…えっと、昨日思ったんだけど、君はいつもここで昼食食べているのかな？」

「ええ、まあ…」

「そうかあ、珍しいね、ここ、あんまり人が来ないと思っていたから」

「君はよく来るの？」

「うん、時間的には昼休み終了間近だけど、だから、今まで遭わなかったんだね」

そう言いながら少女は隼也の隣に座った。少女の柔らかそうな髪が風になびく。

隼也は昨日、思った疑問をぶつけてみることにした。

「気になっていたんだけど、午後の授業は出てないよね？屋上に来た時間からして…」

「うん」

「いつも？」

「うん」

「午後の授業は？」

「でていない」

予想以上にはつきりと少女は明言した。ここまで悪気が無いと潔い。

「…大丈夫なの？」

「私テストで点数とれるから心配ないの」

「あ、そう…うらやましいね」

少女は澄み渡った空の向こうにある遠くの山を見ながら言った。

「…朝はね、学校で頑張ろうと思って、実際頑張れるのだけど、一日の半分を過ぎるとね…こうして、一日を過ごすのが無意味に思えてきて、午後は、モチベーションが下がっちゃって駄目なんだ」

隼は自分の隣にいる少女を見た・綺麗な眼をしている・この資本主義社会の向こう側を見ている眼・ありとあらゆるものを見ている眼・

「だから・午後はここでずっと・まったりしている」
隼は少し・間をあけてから・言った・

「俺も・そうなんだ」

今度は少女が隼也の方を見る・

「だから・こうして・昼休みに充電するんだ」

空は晴れ・少し・冷たい風が心地よい・

「充電時間短くていいなあ」

少女は視線を山に戻して・言った・

「自己紹介まだだったね・私・藍津澗と言います・学年は2年」

「俺は高遠隼也・1年・よろしく・先輩」

紅の使者？

それから、高遠隼也は昼休みを藍津漣と過ごすようになった。一人で過ごしていた時間を2人で共有するようになったが、特別に何かをするわけでもなかった。その日の朝に起きた友人の失敗談や、教師の寝ぐせ等の他愛もない話題を報告し合ったり、時には自分の考えを独り言のように話しているのを一方が何ともなしに傍聴したりした。また、お互い何も話さないで、ただ一緒にいるだけの時間を過ごした昼休みもあった。

彼は、一度放課後にも屋上に行った時があったが彼女はいなかった。どうやら、この時間帯には彼女はもう学校にはいないらしい。彼女に会えるのは昼休みの時だけだった。

屋上から階段を降りて廊下を渡り、さらに階段を下りて、しばらく歩いてみると、隼也は佐屋宗を見かけた。誰かと楽しげに話している。しかし、ここは3年生の教室が並んでいる廊下である。ということは、佐屋宗の話し相手は3年生とみるのが妥当だろう。転校してきてからまだ一週間ぐらいしか経っていないにもかかわらず、あのように親しげに上級生と会話できることから、佐屋宗のコミュニケーション能力はかなり高いといえる。隼也はそんな彼女に少し感心し、その場を後にした。

「最近楽しいことあった？」

ある朝、隼也が教室に入り、自分の席に着こうとすると佐屋宗は言った。

「なんで？」

「初日に会った時と雰囲気が違うから」

「それなら、初日だけ機嫌が悪かったと思う方が自然じゃないか」
そう言いながら、隼也は鞆を机の横に掛け、椅子に座った。

「ああ、そういう見方もできるね」

佐屋宗はわざとらしく手を打って見せた。

「けど」

「君は日常に退屈しているタイプの人間でしょ？」

その言葉を聞いて隼也はゆっくりと佐屋宗の方を見た。見てしまった。

「だから、最近良いことがあったんじゃないかな、という佐屋宗智生ちゃんの予測でしたっ」

佐屋宗は自分のゲンコツをこめかみにコツンツとやってみせた。

「俺は退屈そうな顔に形成されているのかねえ」
フウツとため息が聞こえる。

「まあ、今まで生きてきた跡はなかなか消えないもんですよ」
隣の席の彼女が言い終えると、いつも騒がしい友人がドアの向こうから現われ、朝の挨拶を大声でしてきたので、2人だけの会話はそこで終了した。

「俺って退屈そうな顔している？」

いきなりの少年の質問に藍津澗はキョトンとした。

「なに？いきなり」

「クラスの人に言われた」

正確には顔が退屈そうとは言われていないが。

藍津澗はじーっと隼也の顔を横から観察した。そんな彼女を隼也は顔は動かさず、眼だけで追った。

「うーん、そんなわけはないと思うけど…どこにでもいる可も不可もない男子学生だよ？」

「それ、褒めてる？けなしてる？」

実際彼は無難なタイプであった。顔はモデルのような華やかさはないが、見るに堪えない造形でもない。頭髪は耳にかからない程度

の長さでまとめられており、髪の色は黒・体型、春に測った時は168センチ、体重50キロ。

「一応自分でも認識はしてたけどさー…あんなこと言われたのは初めてだな」

「その子、鋭いのね」

「普段はそんな感じしないけどな」

深く1人で思案するよりは先のことをあまり考えず大勢で馬鹿騒ぎするイメージ。佐屋宗の第一印象はまさにそれだった。

「人間、表面だけではわからないってね。今度、その子連れてきてよ、面白そう」

「あいつの周りいつも人いるからなあ、一応誘ってみるけど、期待はしないでくれ」

オーケー、と藍津は了解した。

「もうそろそろ教室行かないと、午後の授業始まるよ、シユン」

藍津は右腕の時計を見ている。

「じゃあ、そろそろ行くわ。また明日…」

そこで、隼也はふと考える素振りを見せた。

「あのさ、藍津はいつも何時くらいに帰るの？昨日、放課後に屋上来てみたけどいなかったからさ」

隼也の質問に藍津澪は2、3秒間をあげ、答えた。

「あー、いつもは午後2時半くらいに帰るの。この場所は好きなんだけど…ちよつと家が忙しくて」

「…そうか、じゃ、また明日な」

隼也はそう言うのとドアの向こうに消えていった。人間、立ち入ってほしくない領域がある。無理に立ち入る必要もない。例え、興味を持って無理矢理侵してはいけない領域。彼女の言葉はそれを感じさせた。それでも、もしかしたらいつか、そつと教えてくれるかもしれない。それはただの気まぐれかもしれないけれど、いつかその時が来るのを待とう。彼女がそつと耳打ちしてくれるまで。そんなことを思いながら、隼也は階段を下りて行ったようにみえた。

放課後・赤い夕暮れ・

「じゃ、俺部活あるからまた明日な」

そう言つて友人は校庭へと向かつていく・

「おう、部活頑張れよ、夕ヶ」

隼也が法武を見送つた後、校門の方へ歩き出すと、夕暮れよりも赤い髪の女子生徒を見つけた。佐屋宗は学校の方をじっと見ていた・

「佐屋宗、なにしてんの」

「おお、シюнちゃん」

赤い彼女は大げさに驚いてみせる・

「『ちゃん』はやめろ。そつえば、佐屋宗は部活まだ、入らないのか？」

「シюнちゃんは何部？」

「俺は帰宅部。だから『ちゃん』はやめろ」

しかし、隼也の言葉は彼女には届いてないようであった・

「ウチもシюнちゃんと同じ帰宅部だよ、前の学校でもそうだったし」

「…へえー、なんか意外だな。佐屋宗は放課後も大勢で何かしているかと思つた」

隼也は何かをあきらめた様子で会話を続けた・

「うーん、ウチの場合、転校が多くてさ。部活入つても、すぐ転校しちゃうから意味ないと思つて」

「えつ、じゃあ今回もまたすぐに転校するのか？」

以前、会話に出ていた佐屋宗の転校の理由を隼也は思い出した。確か、くだらない理由だったような。あれはただの冗談か。やはり・

「…シюнちゃん、ウチが転校してきてどれくらいが経つかなあ？」
生ぬるい風が吹いた・

「えーつと、1週間とちよつとだと思つけど…」

「ウチね、今日までに学校の全生徒、全教員、全職員さんと話をしたんだ」

「えっ!?マジで?」

突然の衝撃告白。その時、隼也の脳裏に昨日見た佐屋宗と上級生の会話場面が思い浮かんだらしい。なるほど、あれはそういう目的があったのか。

「そういえば、俺見たわ。昨日お前が上級生と話してるところ。何かのチャレンジ精神なの?それ。というか、コミュニケーション能力高すぎるだろ」

「早めに、その人がどういう人か知りたいたんだ。時間が無いからふと、隼也は佐屋宗を見た。いつになく、穏やかな瞳だ。

彼は顔を違う方向に向けた後、うーん、と言い、次に意見した。「でもさ、少し話しただけで相手がどんな奴かって解るかな?表面だけじゃ理解できない部分もあると思うけど…」

彼の発言を聞き、しかし、彼女は特別感動したような顔もせず、ただ微笑んだ。

「そうかな、表面の発言から汲み取れる裏の顔もあると思うよ。それこそ、いろいろな経験をしていたら」

少年は少女の顔を再度見た。微笑んでいる。微笑んでいる。微笑んでいる?

風は生ぬるい。生ぬるいのが気持ち悪いのか、彼の身体が少しだけ、ほんの少しだけ震えたようにみえた。

「そして」

「大体の人間のベースは同じ。細かいところは千差万別でも、大事なところは同じ」

その台詞を発した時、彼女は地面を見つめていた。隼也は彼女がどんな表情で発言しているのかを確認したかったが、できなかった。それに少しの不満と多大な安堵感が生まれていた。

「って知り合いの子が言ってた気がする!」

明るく佐屋宗は隼也の方を見上げて言った。満面の笑みだ。先ほどの静かな微笑みは消えていた。

「へ、あっああ！知り合いがね」

隼也は少し拍子抜けしたように返した。生ぬるい風は温かみを持っていた。

「智生」

向こうで佐屋宗を呼ぶ声がある。同じクラスの女子達が学校の玄関先にいた。

「呼んでるぜ、佐屋宗」

「お、ゆきちん達だ！じゃ、シユンちゃんっ」

「おう、また明日な」

隼也は玄関先に向かおうとしている少女に手を振り、その場を後にした。

彼女が玄関先に辿り着くまであと5秒ほどか。

「明日ね、バイバイ」

少女の別れの言葉は彼に聞こえていただろうか。

夜中、隼也は着替えの最中にふと、思った。彼女。藍津澪は朝にはあの屋上にはいないのだろうか。もしかしたら来ているかもしれない。来ていないかもしれないが、彼女はそれには一切触れていない。明日朝行ってみようか。朝屋上の階段を上り、彼女がいると嬉しい。彼女ともっと時間を共にしたい。それは自分がこの世に存在することの確認であるような気がして。

快晴。翌朝、彼が屋上に行くと、彼女はいなかった。時刻は午前6時半。朝のHRが始まるのが8時半なので、あと、2時間寝られる。ここは日当たり最悪だが、贅沢は言っていられない。寝られることは幸せだ。少なくとも、普段7時半起きの彼にとっては。

静かだ。誰も彼の安眠を邪魔することはない。しかし、彼は彼女が自分が寝ている間に屋上に来ることを少し期待していた。そして、いたずらに彼を起こすのを期待していた。

しばらくして、彼は眼を覚ました。彼の顔は十分な睡眠をとったことを物語っている。

「アラーム…まだ鳴らないのか」

そんな独り言を言いながら、彼は携帯電話を確認した。

08:50

最初の授業が始まる時間、午前8時40分。完璧なるアウトだ。どうやら、アラームは鳴っていたらしいが、気付かなかつたらしい。

「…今度から、クラシックはやめよう」

彼は急いで屋上のドアを開け、階段を駆け降りた。

彼は渡り廊下を駆け抜け、校舎の東を目指した。久しぶりの運動に彼の肺は悲鳴を上げているようだった。肩にかけている鞆もまたネックだ。昼休みの時は、いつも食べる分だけを持って行くので、余計な負担は彼にはかからない。こんなことになるくらいだったら、鞆を教室に置いてから屋上に行けばよかったのだが、面倒くさかったのだらう。何より、このような状況に陥るとは彼も予測していなかったのだから。

「きゃー!!」

その時だった。本当の悲鳴が響いてきた。それは彼が今、丁度、曲がろうとしている角の左方向から聞こえた。声質から察するに女子のようだ。何事かと、彼は少しスピードを上げて、音源に向かった。

しかし、彼が予想していたのは、最悪でもふざけていた男子が窓ガラスに突っ込んで大げがとか、三角関係の修羅場とかだった。実際、高校での悲鳴なんて最悪その程度だ。誰もこんな状況を予想しない。予想できやしない。角を曲がった彼の目に飛び込んできたのは赤だった。おびたらしい赤。それと…転がる。人間。それも複数。彼が後ろを振り向くと、向こう側も赤だった。よく見ると、彼がさつき走ってきた廊下の正面にある掲示板にも赤が付いていた。その下の床にも少量だが、赤は付いていた。一面中の赤。ところどころ、点。これは、絵の具か。ドツキリ作戦か。隼也は茫然と立ちすくむ。

「やめろおお！」
今度は聞きなれた人物の声が左側から聞こえた。隼也は廊下の向こう側へ走った。先ほどよりも、速く、本気で。

「タケー!!」
友人の声のする方向に走って、走って、角を曲がり、左方向を見た。法武がいる。おそらく、彼の手前には階段が位置しているはずだ。こちら側からは確認はできないが、法武は階段に向かって叫んでいるようだった。

友人の呼び声に法武は反応した。そして、こちら側に向かってきた。
「シユン！たすけっ」
彼の顔は友人に出会って救われたような表情だった。その表情は隼也にはとても印象的だった。忘れることは、できないだろう。

その時、影が現われた。その影は眼にも止まらぬ速さで、剣を振り、容赦なく法武の心臓部分を貫いた。

「うぐっ…」

紅の使者？

高遠隼也は教室の外に張り出されている座席表を見ていた。彼は自分の名を探す。とは言っても、入学当初の席順というものは大概出席番号、つまり、姓名順だと相場が決まっている。座席に記載されている名前を適当に追いながら「高遠隼也」の文字を見つけ、教室の真ん中の列、後ろから二番目の席に腰を下ろした。ふうつと隼也の口からため息が漏れた。外は相変わらず騒々しい。まあ、入学式はどこの学校もこんなものか。

「やあ、少年！ため息なんかついて陰気くさいぞ！」

どおーん！音をつけるとすれば、これが相応しかった。隼也が後ろを振り向くと、そこにはパーマで茶髪頭の少年が思いつきりの笑顔を見せていた。

「はあ…どうも」

隼也は一瞬ひきつった顔を見せたが、瞬時に笑顔で対応した。

「いいかい？少年よ！これから俺たちは、高校生活で彼女つくってウハウハの薔薇色スクールライフを送るんだぜ？もつと爽やかでカツコいい姿勢でいなければ！」

その時、隼也はマズい、といった面持ちに変わった。コイツ

は、はた迷惑なテンションの持ち主だ…

その後も少年の一方的な高校生活未来予想図は10分にわたって続いた。その後、担当の教師が入って来たため、少年は話を中断した。話を延々と聞かされていた隼也の顔には疲弊の色がにじみ出ていた。少年は席を立ちながら、言った。

「というわけで、これからよろしくな！」

「…はあ」

隼也にはもう、愛想笑いをする気はなくなっていた。それどころか、いい迷惑だ、という主張が表情にうつすらと出ていた。しかし、彼は全然そんなことには気づいていない様子で。

「あ、そういえば自己紹介まだだったな。俺、きたやまのりたけ喜多山法武。お前は？」

「…高遠隼也」

本当にしようがなく、聞かれたからしようがなく、といった様子で隼也は名を告げた。

「じゃ！シユン！また後でな！」

そう言っただけで法武は前の方へ移動していく。

「…馴れ馴れしい…？とかどこに行くんだよ」

ふと、辺りを見回すと、教室の隅の方に3人の男子集団があり、1人は困ったようにこちら側を見ていた。

席は、出席番号順に決められており、奴は喜多山…その時、隼也はおぞましい真実に気づいた。

「お前、俺の後ろの席じゃなかったのかよ！！」

高遠隼也人生最大の叫びビュッであった。

後日よくよく聞くと、法武は遠い地域から引っ越ししてきた、この学校に通うことになり、早く友達をつくらうと必死だったらしい。隼也はその話を聞いた後、友人に「お前、あの時結構滑っていたぞ」と言った。

法武の周りは今、赤い血で満たされている。彼に動く気配はない。隼也は目の前で起きている事態を把握しきれない様子だった。いや、把握したくなかったのだろう。

佐屋宗智生はそのような隼也を微笑みながら、見つめていた。

「…んで…笑ってんだよ」

女の赤さは廊下に散らばる血の赤と馴染んでいた。

「なんでそんな怖い顔してるの？シユンちゃん」

少女は静かに言葉を発しながら、ゆつくりと隼也の方へ近づいてきた。隼也は目の前の殺人鬼から逃げるように、しかし眼を見つめたまま、佐屋宗の歩調に合わせながら後退していく。少女とは逆の方へ振り返って走って逃げることもできただろう。しかし、彼はそうはしなかった。彼は思ったのだ。　　眼を逸らした瞬間、殺される

「来るな…」

少女は気にせずに少年の方へ歩を進めていく。

「だってさあ、シユンちゃん、この世界嫌いなんでしょ？否定してるでしょ？」

隼也は佐屋宗の発言に微かに動揺する。

「お前、何言ってる…」

「タケなんてさ、完全に『この世界』に馴染みきっている人間じゃん？なんで、彼を認めてるのかな、シユンちゃん」

「…！」

隼也は思っていた。この世界は退屈だと。この予定調和な世界が気に食わなかった。法武は正対だった。この世界を楽しんでいた。この世界の中で精一杯生きていた。時々、そんな彼に苛立ちを覚えたこともあった。

何故、彼と話していたのだろう。笑い合っていたのだろう。それは

「わっわかったような口をきくな！転校してきたばかりのお前が一体俺の何が解かるって言うんだ！」

隼也の背後はもはや壁だった。行き止まり。イキドマリ。

「わかるよお」

佐屋宗は相変わらずの微笑みで、しかし、その笑顔には何も感じ取

れなかった。無機質。

「解かっていない」

「解かるんだよ」

「うぬぼれるな」

その時、佐屋宗の眼が暗くなった。

「うぬぼれているのは、シユンちゃん、君だよ」

少女との距離は、もう、3mほどになっていた。

「世界がこういうモノだと決めつけて、勝手に解かった気になって」

「来るな…」

「勝手に絶望して」

隼也の眼に、少女が持つ刀の光が映った。血が滴っている。

「来るなって…」

もはや、足掻く気力もない。彼は座り込んでしまう。

「かといって、世界を敵に回して自分の信念を突き通す根性もなく」

そして、隼也と彼女の距離は1mとなった。

「まして、世界どころか目の前の真実にも気付かない」

少女の剣を持つ手が弧を描くように振りあげられ

「そんな愚か者が、ウチは一番大嫌いなんだ」

彼女の表情に、もう笑みはなかった。

隼也は叫び声をあげることもできず、今、まさに振り下ろされようとしている剣を見つめるだけだった。

ヒュンッ

その時、隼也は佐屋宗の背後に光る小さい物体を見た。次の瞬間、佐屋宗は素早く振り返り、剣を振った。すると、カキンッという金属音が廊下に響き渡り、隼也のすぐ横の壁あたりで衝撃音が聞こえ

た。それはクナイのような形状をした小型のナイフだった。
佐屋宗は背後の壁に刺さったナイフをチラッと見やり、また、振り返った。

「まさか、もう到着するとはね」

隼也は佐屋宗の言葉で気づいた。向こう側に誰がいる

「…その生徒から離れなさい」

少年の身体はビクツと反応した。その声に、隼也は聞き覚えがあった。柔らかな声。唇と一緒に澄み渡る空の下で過ごした少女。最近見つけた同志。

「え…」

少年は動揺する。まさか…

「やつぱり、観^{みほり}保守は仕事が早い早い…ところでさ、ウチがナイフを弾き飛ばさないうで避けていただけだったら、この一般生徒死んでいたかもよ？」

「それは、心配なく」

次の瞬間、彼女は佐屋宗に向かって、人間とは思えない速さで駆けて行った。

「彼の数cm前で落ちるように投げましたから」

少女は上着の中から先ほど投げたナイフと同じ物を両手に持って攻撃態勢に入った。

「ぬかりないねえ…」

佐屋宗は相手の行動に合わせ、剣を構え、向かっていく。

次の瞬間、佐屋宗が移動した際、その廊下との間の隙間から隼也の眼に見覚えのある少女が映った。

「藍津…」

しかし、少年はその正体を眼でとらえても、やはり、その場から動くどころか、立ち上がることもできなかった。それでも、彼は呟いた。力なき声で眼の前の敵がどんなに危険であるかを伝えるかのように、震える声で。

「…なんで…戦うなよ…相手は気違いなんだ…逃げて…」

「逃げてくれ…！」

そのような少年の願いなどむなしく、2人の刃が交わった。再び金属音が響き渡る。それから何度も何度も響き渡っていく。

「その制服…このだよな？随分前から潜伏していたのかな？でもだとしたら、ウチに気づかないっていうのも変な気がするなあ」

漣は表情一つ変えずに二つのナイフを用いて淡々と応戦する。

「…あなたには関係のないこと」

「ケチ」

佐屋宗はにこやかに言い放つと、下に屈み、足を狙うように剣を振り払った。漣は、これまた人間とは思えない跳躍をし、天井近くまで飛んだ。すると、佐屋宗はそこを狙うように剣を天井に向けて突き上げる。しかし、少女は瞬時に天井を蹴り上げ、微妙な角度を着けた軌道を描き転がる形で再び地面に着地した。そして、このことにより、今度は漣が隼也の眼前にいる配置となった。

再び鳴り響く金属音。どちらも人間業とは思えない戦闘を繰り広げていく。

「藍津…」

茫然と見つめることしかできない少年。現状把握も十分にできていない様子である。いや、この状況を十分把握できる人がいたとしたら、その人のこれまでの境遇を聞いてみたいが、ともかく、少年は茫然自失だった。その時、ふと、2人の向こう側に広がる景色を見つめた。そこには赤い廊下。転がる屍。この世の地獄絵図だ。

法武：昨日まで馬鹿な笑い声で馬鹿見たく笑っていた…今度の週末についての予定を熱く語ってもいた。人生初の難破に挑戦とか。そんな勇気もないくせに。彼の表情は、もう、変わらない。

そこで、再び少年は認識した。この現状を。

「つくしろう…藍津！逃げる！そいつは…駄目だ！やばい！」

我に返った少年は自分の眼の前で戦う少女に向かって叫ぶ。まるで、

この世に残された唯一の希望を守るように。必死に。

その声が届いたのか、しかし、振り向かないで澪は答えた。

「シユン、聞いて！私が彼女を引き付けている間に近くにある階段から逃げて！」

少女から3mほど離れた奥の方に階段はあった。しかし、彼はそれを良しとはしない。

「駄目だ！俺だけが逃げてても…お前が生きてなきゃ駄目なんだよ！」

「素晴らしい人間愛だねえ」

茶々を入れるかのように佐屋宗が口をはさむ。相変わらず金属音は響いている。

「だけど、ごめんね」

ふっ、と隼也と佐屋宗の視線が合った。佐屋宗の口元には笑みが浮かんでいる。

「これで、終わり」

次の瞬間、佐屋宗は回し蹴りを仕掛けてきた。澪は後退して攻撃を避ける。しかし、素早く回りきった佐屋宗の手から、剣を持つていたはずの手から、光る物体が放たれた。

「！」

澪は眼を見開いた。

少年は眼を疑った。

彼女はただ、前を見ていた。

「藍津…？」

隼也の先に立つ少女は固まっていた。そして、ゆっくりと隼也の方を顔だけ動かして振り返った。その顔には笑みが浮かんでいた。

「シユン…」

少女が次の言葉を言おうとした、その刹那、隼也は赤い少女が床に

落とした剣を拾い、澁の傍まで移動していることを認識した。

「やめろ…やめろおお!!」

間に合うように、少女を守れますように、彼は立ち上がっていた。そして、走り出した。その声に反応するように、澁は前に向き直る。しかし、彼女は、佐屋宗は学校生活で見せていたのと同じ笑顔で答えた。

「駄目」

次の瞬間、隼也は澁の後ろ姿の首辺りから赤い粒が飛び出していくのを見た。

出会ったのはごく最近。大して深い話もしていない。家庭の事情なんて全然知らない。言いたいときに聞けばいいと思っていた。ただ傍にいてほしかった。それだけ。だけど、もう、それすらも叶わない。

ドサ、澁は仰向けに倒れた。彼女の腹部には先ほどの光る物体の正体。ナイフが刺さっており、赤い色が染まっていた。

隼也はその光景を見て、力なく膝を落とした。彼の顔には、怒りや憎しみといった、強い感情はまだ表れていなかった。ただ、眼の前の現実を否定することだけで精一杯という風だった。

「剣を持っているからってそればかり使うとは限らないんだよねえ」

佐屋宗が独り言のように呟いた。

「大丈夫だよ、シユンちゃん」

座り込んだ隼也に見つめながら、そして近づきながら、彼女は言葉を紡ぐ。

「もうすぐ同じところに行けるから」

もはや、彼の世界は崩壊していた。そのためだろうか。今度は恐怖もなく、ただ、諦めにも似た表情となっていた。彼の眼には転がっている涙しか映っていないかった。しかし、佐屋宗はそんなことを気にもせずに、一人芝居を行う。

「もつとも」

「死後の世界があれば、の話だけどね」

今、紅の使者は少年のすぐ前にいる。

紅の使者？

少年は終わりの時を待つだけだった。ふと、視界を上へ移動させる。佐屋宗智生の髪の色が眩しかった。自分の身体からも、あの赤が溢れ出て行くのだろうか。

死というものは身近なのに遠い。日常生活において、常に傍に潜んでいるにも関わらず、意識すらしていない。それは、きつと、どんなに切れない関係であっても、人間が死と一緒に存在することは絶対にならないから、かもしれない。しかし、それでも高遠隼也は自分が死ぬのだということだけは理解できた。

ドドドオオオオオオーン！

超、爆音。およそ、日常生活では聞くことのないような、とんでもない音だった。まるで、建物が崩れるような…。

「!?!」

隼也は我に返った。廊下の奥の壁が崩壊しているではないか。佐屋宗も、爆音の元凶がある方向へと、ゆっくり、自を向ける。

「よお、サヤムネのお嬢さん。あいかわらず、好き勝手やってくれているなあ」

最初は舞い落ちるコンクリートの粉のせいで姿が定かではなかったが、壁があった穴の前には作務衣姿をした壮年の大男が立っていた。男は眼前の光景に緊張感も持たず、寝癖のついた頭を掻きながら欠伸をしてみせる。しかし、男の左手には、おそらく壁を壊した原因であろう、ロケット砲があった。

「観法守も案外雑なところあるよねえ…普通、壁壊す？」

男の先の行動に、少し呆れた様な口調で佐屋宗が言う。

「殺人狂に常識語られちゃ、世界滅んじゃまうよ」

そう言った、次の瞬間、男はロケット砲を持ち上げ発射態勢に入った。

「ちよつと、ちよつと、さすがにそれは、この子にも被害及ぶですよ。あの女の子みたく、短剣なら、ともかくさ」

そう言いつつ、佐屋宗は視線を、少し先にある溼の遺骸へと向けた。男は佐屋宗の視線を追って少女を探り当てると、一瞬眼を見開き、驚いた様子を見せた。そして、小さく、「そうか…」と呟き…

「よし、少年！上手くかわせよ！」

言った方が先か、発射した方が先か…男のロケット砲からためらいもなく、物凄い勢いでロケット弾が飛び出て来た。

「えー！ちよつ…」

「まじですか…」

いきなりの出来事に慌てる隼也。一方、佐屋宗も本当に撃ってくるとは思わなかったらしく、半ば茫然とした口調で口角を少し上げ呟いた。

とにかく、逃げなければ殺される…隼也は反射的に生存本能に身を任せ左前に低くスライディングした。とは言っても、ここは廊下なので移動できる距離などたかが知れている。しかし、運よく弾は隼也が移動した方向とは逆方向に逸れて行った。

ドオオオオオン…！！

「…！！」

攻撃は避けたが、弾が壁にあたった瞬間、爆音とともに破片と突風、巨大な衝撃が隼也を襲う。

「…」

衝撃音が落ち着き、隼也は恐る恐る瞼を開いた。飛び散った破片のせいで彼の身体には少しかすり傷ができていた。彼の向かい側斜め攻撃が当たったと予測される場所は、天井を崩落させるほど

の大きな穴が空いており、床にはその残骸が積もっている。

「あー、もう本当にむちゃくちゃだなあ」

どのように、先ほどの攻撃を避けたかは解らないが、佐屋宗は隼也の5mほど先に立っていた。

「つち、やっぱり避けられたか。やっぱ、近接攻撃じゃないと効かねえのかな」

男はそう言うと、ロケット砲を捨て、腰辺りから細い短剣を両手に3本ずつ器用に装備した。

「そうだねえ、佐治さん^{さじ}とここで戦うのも面白そう」
相変わらず陽気な調子で佐屋宗は返す。

「でも、残念。時間切れみたい」

その時、上の階から、帽子を被った一人の少年が降りてきた。学校の制服は着ていないが年齢は隼也と同じくらいだ。

「トモ！もう外に観保守の奴らがうじゃうじゃ…ってなんだ、これ！」

少年はボロボロになった廊下の様子を見て驚いた。

「キユウちゃん、その人、観保守の人」

佐屋宗が向かいにいる男を指した方を見やると「げ、やべ」と言い、少年は少女の方へ距離をとった。

「つつーわけだから、さっさと行くぞ！」

「はいはい」

そう言うと、佐屋宗は自分に近い窓から乗り出し…途中で隼也の方を向いた。

「じゃ、ね、シユンちゃん。また今度」

赤き転校生は、いつも通りの屈託のない笑顔と調子のいい声色で言った。しかし、眼の前の得体のしれない狂人の笑顔は隼也を震撼させるのに十分であった。そして、彼女は再び外の方に向き直り、窓から飛び上がった。ここは3階だが、飛び降りるといふのなら、まだ隼也の予想の範疇だったろう。しかし、彼女は窓から飛び上がり、おそらく隼也の角度からは見えていなかったらうが、剣を物

凄い勢いでコンクリートの壁に突きさし、物凄い勢いで抜き、また上を目指して剣を刺し…を繰り返し、校舎の上へと昇って行った。帽子をかぶった少年も彼女の後を追う。しかし、彼はワイヤーらしきものを使用して行った。

隼也が茫然としていると、また階段から足音が聞こえてきた。今度は下の階から駆け昇ってくる音であった。

「佐治さん、奴らは!？」

隼也の眼の先に現れたのは少々つり目で端正な顔をした、これまた隼也と同世代の少年だった。髪の毛が少し伸びているためか、声を聞かなければ女子と間違われそうな容姿だ。

少年の問いに佐治と呼ばれる男はクイツと顎をあげた。

「上だと…!?馬鹿な、逃げ場所が…」

その時、バラバラバラ…とプロペラが旋回する音が近づいてきた。その音を聞き、少年はハツとする。

「まさか、ヘリコプターを使って…!?しかし、それなら機体が目立つ分、追跡が可能…」

「まあ、やってもいいが、多分無駄だな」

佐治はポケットから煙草を出しつつ、口をはさんだ。

「なぜです!？」

少年は勢いよく、佐治の方を振り返った。

「多分あいつらは適当なところ…森の真上とかでヘリから飛び降りて、姿をくramsさ。地上で追跡を続けてもこっちの戦力が減るだけだろうな」

男のその言葉を聞くと、少年はうつむき、悔しそうに舌打ちをした。次第にプロペラの音が小さくなっていく。

「それより、ここの片付けの方が先だ。人員総動員、作戦Fでいくぞ」

隼也は今、何が起きているのか理解できず、男たちのやり取りをただ茫然と眺めていた。一服している男は、そんな彼に眼を止め、そして近づいてきた。

「そういえば、お前がいたなあ。よつ、大丈夫か？」

形振り構わずロケット弾を発射した男が言えたことではなかったが、隼也は混乱しているらしく、抗議する様子も見られない。

「お…俺…一体…あ…」

彼の眼に滲の遺骸が止まった。血が彼女の周囲に無情にも広がっている。これは夢のだろうか

「あ…いづ…」

彼女は寒そうだった。外は蒸し暑くなっているのに。もう少し日当たりのいい場所へ移動させてあげるべきだ。彼女にそこは似合わない。

隼也は膝をついたまま彼女の方へ向かった。ゆっくりと、だが着実に。

もう少し

隼也は藍津滲のもとに辿り着いた。ゆっくりと肩を持ち上げる。すると、反動で彼女の顔が彼をとらえた。

それは、高遠隼也が見たことのない藍津滲であった。よどんだ瞳、少し開いた口、青黒い顔とは対照的に、赤い首元…

「あ…あ…」

少年が絶句しているその時、男が彼の眼前に立った。

「少年…滲の知り合いか…」

「お…俺…俺…」

隼也は力なく、佐治を見上げる。そんな彼を憐みのような眼で見つめ、男はため息をついた。

「いや…いい。何も考えるな。何も見るな。何も聞くな。何も話すな。今は…」

そして彼は右手を振りあげ…

「ゆっくりと休め」

数秒後、彼の意識は途絶えていた。

白い部屋

「シユン」

声が聞こえる。優しい、お日様みたいな声が。

「あ…いづ？」

そこは屋上であつた。瞼を開いた少年の視界には青い空と藍津漣の姿があつた。

「こんなところで寝ていたら風邪ひくよ」

「俺…朝からずっと待っていたんだ」

「私のことを？」

「ああ」

「なんで？いつも昼に会えるじゃない」

「まあ、そうなんだけど…：：：そういえば、今何時？」

「午後の12時30分。ただいま絶賛昼休み中です」
彼女は悪戯に笑う。

「うわ…マジかよ」

「サボっちゃったね」

「まあ…たまにはいいさ」

少年は自分のカバンから昼飯を取り出す。

「俺さ、何か怖い夢を見ていた気がする」

「どんな？」

「…忘れた」

それから、2人は他愛もない話をしながら昼食を摂つた。昨日見たテレビ番組、近所のおばさん、通りすぎに見た犬のこと…。

「今日も空は青いね」

不意に、漣が言った。

「なんだよ、急に」

「私、もつとこの空眺めていたかつたなあ」

そう言いつつ、彼女は屋上の出入り口へと歩みだした。

「おい…藍津」

少年は急に不安になった。自分と顔を合わせてくれない少女に、遠くを見ている少女に。

「ねえ、シユン」

少女は振り向く。泣きそうな顔で。

「！」

場面はいつの間にか廊下。辺りは赤で染められている。

「やめる…」

少年は嘆願する。彼は、彼女の泣きそうな顔を覚えていたし、その結末も知っていたからだ。澁は彼の様子を静かに見つめていた。そして、言葉を発する。

「言いたかったことがあるの…」

「…え」

少女は何かを言っている。彼は彼女の言葉を一生懸命聞き取るつもりだった。しかし、彼女の声は届かない。

ドサツ。

そして

彼女は

倒れた。

赤い海へと。

その海は

彼女を吸い込み

やがて

全てを飲み込んだ。

「！」

高遠隼也は目を覚ました。カーテンで囲まれている白いベッドの上で。部屋の中は少し、薬品くさい。どうやら、ここは医務室らしい。

「……」
彼は冷や汗をかいていた。ワイシャツがびっしょりだ。呼吸も荒い。兎にも角にも、彼はとりあえず、起き上がるうとした。現状理解のために周囲を散策したかったのかもしれない。靴はベッドの下に無かったが、隼也は裸足で歩くことに決めた。その時、制服の上着も見当たらなかったが、それもまた、気にしないことにしたらしい。彼がカーテンを開くと、部屋の隅に位置する机の前に白衣を着た若い男が座っていた。

「あれ？起きたの？身体大丈夫ー？」

男は振り向き、眼鏡を上げながら屈託なく言った。

「身体：あ：大丈夫です」

隼也は今いるこの状況が理解できていないようだったが、反射的にそう返した。

「まあ、自立つ外傷はないようなんだけどねー。軽い打撲ぐらいで、佐治さんが殴ったのが一番ひどかったけど」

「殴……」

少年はハツとした。脳裏には中年の男に腹を殴られた時のことが巡っているようだった。そして、真っ赤な教室、藍津湊、佐屋宗智生。

「がっ学校：そうだ、学校！学校はどうなったんですか！？」

あ、夢だったら言うってください！笑ってもいいです！というか夢ですよね！ははっ！」

隼也は狂気にも似た面持ちで、白衣の男に詰め寄った。それは願いにも思えた。男は、眼の前の少年に少し、憐れむ様な眼差しを向け、言った。

「良いかい？高遠隼也君。それについて言うのは簡単だ。しかし、今の君に、私からは言えない。それ相応の準備をしてから適した人間に教えてもらう必要がある」

「つつぶざけんな！！」

少年は激昂した。勢いよく男の胸ぐらを掴み、叫んだ。この、小さな部屋に響き渡る大声で。

「否定するならしろよ!! こっちは馬鹿じゃない! 馬鹿じゃないんだ!! もし…嘘じゃないなら…そんな中途半端なこと言うなよ!!」男は自分に今にも殴りかかりそうな姿勢の少年に嫌悪の表情を微塵も浮かべず、ただ、先ほどと同じく、憐れむような眼で見つめるだけだった。少年は男の態度をきつく睨みつけ、しかし、小さく、「つちくしょう!!」と呟き、乱暴に彼の胸ぐらから手を離れた。

「つたく…起きたばかりなのに元気な奴だな」
場に似つかわしくない能天気な声が聞こえた。隼也が視線を向けると、部屋の出入り口付近に佐治と呼ばれる男が立っていた。

「佐治さん、もう仕事は片付いたの?」

陽気な声で白衣の男は尋ねた。佐治はだるそうに、頭といびきをかいた。

「んーや、まだ、完璧に終わっちゃいねえんだけど、大体の仕組みは済ませてきた。後は下の奴らでやってくれんだろ」

「おつかれ! お茶でも飲む? 玄米? アールグレイ? それともジュースかな?」

男は今にも踊りだしそうな様子で彼の注文を聞く。

「煎茶淹れてくれ」

「オーケー!!」

ルルン気分が男が椅子を立った時、これまで二人のやり取りを黙って見ていた隼也が再び叫んだ。

「いい加減にしてくれ!!」

二人は静まって、少年の方を見やる。

「あんたら、可笑しいんじゃないのか!? あんなことがあったんだぞ!? 何をそんなにはしゃいでるんだよ!!」

少年の抗議に、佐治は小さなため息をつき、喋りだす。

「そんなに急ぐんじゃないやねえよ、少年」

なだめる様な口調に、少年の苛立ちは募る。

「…何だと！子供扱いするんじゃないねえ！」

隼也の態度に、佐治は先ほどより、一段階大きいため息をつきながら、彼に近づいて行つた。近づいて、近づいて、近づいて…とうとう顔がくつきさうになつたので、隼也は少し怯み、数歩後ずさりをした。そして、壁に追いやられると、佐治は手をダンツと隼也の顔の傍の壁に叩きつけた。

「いいか、少年、明日だ」

屈んだままの姿勢で男は言う。

「お前の学校で怒つたことの真相を話そう。だが、今日は駄目だ。そんな滅茶苦茶に混乱している脳みそで聞いても理解できないからな。今日一日休んで、少しヒートダウンしておけ」

「な…」

なおも抗議しようとする少年を睨みつけ、遮る。

「もし」

「もし、聞けねえつつうんなら、もういっぺん腹に一発かましてもいいんだぞ」

「…っ！」

「よし、交渉成立だな」

黙り込んで下にうつむいた隼也を見て、ようやく佐治は解放する。

「じゃ、また明日な。灯市とういち、こいつの面倒よろしく」

「了解、任せといて」

そして、佐治は部屋から出て行つた。隼也は床を睨んだままだった。　「でもさあ、あれは交渉つて言うより脅迫だよな」

間の抜けた声で男は隼也に声をかけた。無論、返事はない。男は戸棚から何かの薬品と、注射器を取り出し、何やら作業を始めた。

「まあ、でも佐治さんの言うことに一理あると思うよ。酷い夢の寝起きは興奮しやすいから」

「…一人にしてくれませんか」

ぼそり、隼也は下を見たまま呟いた。

「うん、そのつもりだよ。だけどその前に」

男が隼也に近づいてきた。隼也は暗い面持ちでゆっくりと顔を上げる。そこには、にこやかな表情の顔があった。

「少し、準備させてね」

次の瞬間、隼也の上半身は男側に寄せられ、そして、首に鈍い痛みが走った。

「!？」

隼也が目線を下に移すと、大きな注射器が首に刺さっている光景が飛び込んできた。

「なっ!？」

驚きの声を出すのが、一秒も経たないうちに隼也は床に崩れた。

「いや、心配しないで。少し身体が麻痺する薬を打たせてもらっただけだから。こっちも逃げられちゃ困るしさ」

注射器を抜きつつ、隼也に応えるように、陽気な声で男は言った。そして、注射器を机の上に置くと、隼也を「お姫様だっこ」し、ベッドに運んで行った。ちなみに、男は隼也よりも身長が10cm程高いが、体格は華奢に見える。着やせするタイプで、意外と筋肉が発達しているのかもしれない。また、男が男にこのような仕打ちを受けるということは、大抵は屈辱的であり、隼也もそういった表情を滲ませたが、彼に抵抗する術はなかった。

「よいしょっ」と

そして、隼也は難なくベッドに運ばれた。

「じゃ、今日はここで一日クールダウンしてね。薬は、晩飯時になると効果無くなると思うから。それまでトイレは我慢できるかな？」隼也は黙って男を睨みつける。

「無理だったら呼んでね。瓶持ってくるから」

男は爽やかに言い放った。隼也は動かせない首を、本人なりに一生懸命、数cm動かして抵抗の意を見せた。そのような少年の様子にフツと微笑み、彼はカーテンの傍まで移動した。

「じゃあ、また晩飯時にね。高遠隼也君」

今、少年はカーテンに囲まれたベッドで一人、物思いにふけっている。部屋には人の気配が無い。どうやら、白衣の男は少年に気を使ったのか、出かけているようだった。

少年は学校での出来事を思い返していた。皮肉にも、壮年の男の言ったように、少し時間をおけば、冷静になることができる。冷静になると、あの悪夢のような出来事も混乱しないで思い返すことができた。しかし、それは次第に非現実のように感じられた。まるで、全てが夢物語であるかのよう……。当初も、全ての出来事を夢だと思っていたが、それは彼の願望だった。しかし、今度は、少年の現実が全て夢であるような感覚に陥っていた。

隼也はしばらくすると眼を閉じた。考えを放棄したのかもしれない。今、考えたところで何かを理解できるわけでもないと思ったのだろう。……どうしたって明日、全てが明らかになるのだ。それまで、少しだけ休んでいても罰は当たらない。そして、少年は静かに眠りについた。

白銀の邂逅

「あー疲れた疲れた」

緑生い茂る森の中、少女は背伸びをしながら歩を進める。周囲が暗いのは、生い茂る緑が太陽の光を拒んでいるからか、それとも時刻が夜だからなのか、判別は辛い。

「しかし、相変わらずもつたいたいことを考えるもんだな。あのへり、沼のゴミにするなんて」

並んで歩く少年が半ばあきれた口調で言った。

「いいの、いいの。道忠さんみちただも好きなようにしてくれって言ったし」

佐屋宗智生は声高に返事をした。少年少女二人の少し後ろには、黒いスーツに身を包んだ長身の壮年男が歩いている。

「やはり、追手は来ませんでしたね」

「まあ、前に一回失敗してるからなあ、別の地域では、同じ轍を踏むほど馬鹿じゃないってことか」

「追ってきたら、観保守の人員減らすいい機会だったのになあ」

智生は間延びした口調で言葉をこぼす。しばらく歩いていると、奥の方に白色のワゴン車が姿を現わした。

「さーと、次の行動について、帰ってから話しあわないとね」

先に車の方へ駆け寄ると、さっと振り返り、後ろに続く二人に陽気な調子で智生は言った。

「…」

高遠隼也は重そうに瞼を開いた。視界には覚えのある白い天井が映った。少年は一回深呼吸をし、腕に力を入れた。腕はゆっくりと隼也の眼の前まで移動した。どうやら、先ほど白衣の男に注入された麻痺薬の効果は切れたらしい。となると、白衣の男が言った内容を

信じるとしたら、今の時刻は大体、晩飯時となる。

隼也は数秒自分の腕を見つめた後、身体を起こした。そして、ベッドから下り、白いカーテンの隙間から向こう側を覗き込んだ。どうやら、部屋は現時点では隼也以外の人間はいないようであった。そのことを確認すると、隼也はカーテンを開き、部屋を見渡した。3つほど存在する棚にはどれも色々な薬瓶がびっしりと並べられている。

ふうっ、と隼也はため息をついた。自由に行動できるようになったのはいいものの、自分が起こすべき行動が思いつかないようであった。確か、白衣の男は「逃げられないように」薬を注射した様なことを言っていたはずである。その発言が、さらに、隼也の行動範囲を狭めているのかもしれない。

ここで、誰かがこの部屋に入って来たなら、隼也は自分がどのように動けばよいのか、ひらめく可能性がある。しかし、ドアの向こうからは人の気配は一向にしない。

しばらく経った後、隼也は意を決したように引き戸の摘みに手をかけた。そして、恐る恐る、ドアを横に移動させた。

前、右左右左右右左。隼也は廊下に誰かいないか、顔を少し出して確認した。廊下に人影は見受けられなかった。

そして、そつと戸を完全に開き、隼也は外に出た。しかし、その行動は逃げるためではなく、ただ純粹に施設内に興味を持ったためのものであった。もちろん、逃げてしまつては、彼が知りたいたい真実が永久に失われてしまうため、当たり前と言えば当たり前かもしれない。

隼也はキョロキョロ視線を多方向に移動させながら、ゆっくりと歩いた。廊下は清潔感があり、およそ3m幅の廊下の両側にある壁には所々にドアが並んでいた。雰囲気は医療施設に似ている。

しばらく歩いて行くと、十字路に差し掛かった。真っ直ぐ歩いて行くのも芸が無いと思つたのかは知らないが、隼也は左に進んだ。相変わらず辺りは静かだ。その時、ふいに、今進んでいる廊下の先

にある分岐点の右側からエレベーターが到着した時に発せられるような音が響いた。隼也は一瞬ピクリと反応し、歩を止めたが、数秒経たないうちに、再び歩き始めた。近くには隠れるような部屋もないし、走って戻るには、その足音が響いてしまう。別に、隼也自身、悪いことをしているわけではないと判断したのだろう。

コツン、コツン、と隼也とは別の足音が隼也の方向へと近づいてくる。隼也もその足音へと近付いていく。そして、分岐点。

一本道の廊下を出て、分岐点に立った少年が右側に見たのは、自分と大して年の変わらない白銀の髪色をした少女であった。腰まである長い髪は頭の横側に生えている少量が頭の後ろで留められている。手に分厚い書類を持ったまま、自分の眼の前に現れた少年を見据える瞳は鮮やかなエメラルドグリーン。

「……」

二人のあいだに沈黙が数秒、流れる。

「え……と」

「あなたが、今日運び込まれた人？」

隼也が何か話そうとした瞬間、少女は割って入った。

「ああ……そうです」

「あなた、藍津澪の知り合いだったんでしょ？」

「……っ!？」

相手の予想外に発せられた言葉に隼也は動揺した。そんな少年にはお構いなしに、少女は淡々と切りだしていく。

「藍津澪は死んだのでしょうか？」

「な……!」

淡々と。

「どうやって殺された？情けなく殺された？無残に殺された？」

「……っ!」

淡々淡々。

数歩、少女が隼也の方へと近づいてくる。少年は、自分をまっすぐ見つめる少女に戸惑いと、少量の恐怖を感じたように、後ずさる。

「泣きわめいていたかしら。みつともなく。臆病者だもの」
その時、表情が読み取れなかった少女の顔に陰りが見えた。

「死んで正解だったのよ。あんな奴」

次の瞬間、少年の手は少女へと向かっていた。その顔には先ほどの戸惑いなど微塵も感じられない。在るのは冷たい表情に隠された憤怒。少女の首を右手でつかみ、そして、近くの壁へと勢いよく、少女を叩きつけた。少女の持っていた書類は床へと散らばる。

「…！」

いきなりの少年の行動に、少女は隼也を睨みつける。

「…っ…何すんのよ」

「お前にあいつを否定させたりなどしない」

隼也はそう吐きながら、少女の顔を冷たく見下ろす。

「…黙れ！あんたにあいつの何が解かる！」

少年の横暴な態度におののかず、鋭い形相で、隼也を睨みつける少女。しかし、先ほどの淡々とした姿勢は皆無であった。

少女の言葉を聞き、隼也の眉がピクリと動く。少年は不愉快な表情を浮かべ、そして…

「お前が…黙れっ」

そして、隼也の右手に力が込められようとした。その時、

「おいおい！君たち何やってるの！」

廊下の左側から聞き覚えのある声が出た。あの、白衣の男だ。男は二人に急いで駆け寄ると、力任せに二人を引き離した。

少女が、次の瞬間、咳き込む。隼也は引き離された後も冷たく少女を睨み続けている。

「袖季ちゃん、これ、俺へのだよな？ありがとう。もう情報部に戻っていいよ」

男は散らばった紙をかき集めながら少女に言った。それを聞いた少女は言葉を発することも、隼也を見ることもせず、静かにエレベータの方向へと歩き出し、そして乗り込み、何処かへ消えていった。

「さて」と

紙の回収を終えた男が隼也の方を見て、言った。

「勝手に部屋から出て……。一体何があったの」

「あいつが……藍津のことを『死んで正解』ってほざくから……」
隼也は視線を合わせることなく、俯いたまま呟いた。

「あ……」

男はそう言うと、手で頭を掻きながら、小さくため息を漏らす。

「まあ、あの子にもね、色々あるんだよ。根は悪い子じゃないし」

「……！根は悪くないって！？どこの世界に、人の死を喜ぶ善人がいるんだよ！」

先ほどまで暗い表情をしながら静かにたたずんでいた少年は、男の発言に激昂した。先ほど、少女をたたきつけた際に封じ込められていた感情が吐き出されたように。

隼也の態度を見た男は、再度、小さなため息を漏らした。やれやれ、といった表情だ。

「まあ、君がそう思うのも無理はないけどね。でも、実際、それとは別だけど、この世界には君が知らないタイプの人間もいるだろう？…例えば、『佐屋宗智生』とか」

「……！」

『佐屋宗智生』の名を聞いた隼也は一瞬にして硬直した。そして、ただ俯くしかなかった。

「まあ、もちろん、柚季ちゃんは佐屋宗智生のような人間ではないけどね」

隼也の暗い様子をまるでフオローするかのような明るい調子で、男は話を続ける。

「ただ、ひとつだけ教えといてあげる」

「……？」

男は隼也を見据えながら言った。

「柚季ちゃんの姓名は『藍津柚季』。澪ちゃんの妹だよ」

「……！！？」

男の言葉が信じられないといった面持ちで、隼也は目を見開く。し

かし、驚きのあまりか、言葉を発することはない。男は自分の左手の腕時計を見やった。

「21時5分か…。どうだろう？お腹空いてると思うけど、今回の件についてネタばれを先に行ってもいいかな？」

その瞬間、同様の表情を浮かべていた隼也はその発言を聞き、鋭い目で男を見つめ直す。

赤い学校：赤い少女：赤い、悪魔

「俺についてきなさい。君が知らなかったこと、知りたかったことが解かるから」

隼也の表情を見て、男はうつすら笑みを浮かべながら、エレベータの方へと向かう。隼也は黙って、それについて行った。

異なるモノ？

「奈緒子　・作業進んだ？」

多数の電子機器が配置されている青白く包まれた広い空間・彼女は眼の前のコンピュータから眼を放し、机に置いておいた菓子を食べて、隣に座っている同僚に声をかけた。

「全然　進展なし　・かすみの方は？」

奈緒子は、かすみに合わせて、それまで動かしていた手を休めた。

「んー、こつちも駄目」

身体を伸ばした後、クツキーを奈緒子に渡し、再度、かすみは眼の前のディスプレイを睨んだ。

「あいつら、派手な事している割に痕跡全然残さない・やっぱり、かなりの大物が援助してるね、こりゃ」

「そういえば、昨日だっけ・生存者が運ばれてきたの」

ポリポリとお菓子を食べながら話す奈緒子。

「それで昨日、寮の若い子たちに質問攻めにあつたわよ・生存者なんてすぐく久しぶりのことじゃない・ほら、あの」

「はい、お疲れ様ですー・紅茶いかがですか？」

不意に、ふたりの後ろから間延びした声が聞こえてきた・その声に彼女たちはぎくつと身を震わせる。

「あー、準太君・おつかれー」

口元を少しひきつらせながらも、かすみは笑顔で返答してみた。

「今日はアールグレイとレモンティー、あとダーズリンありますけど、どれにします？」

準太と呼ばれた細長い青年の手には、右にポット、左にはカップとティーパックを乗せた盆があつた。

「あーじゃあ、私、ダーズリン」

「わっ私はレモンティーが良いなあっ」

呑気な調子で注文する奈緒子に対し、かすみはまだ、慌てている。

二人の注文を受けた少年は盆を机の空いているところに置き、ティ
ーパックをカップに入れ、丁寧に湯を注いだ。

「はいどうぞー。良い色になったら取り出してください」

相も変わらず間延びした声で二人にカップを差し出す準太。

「あっありがとう」

ぎこちない笑顔でそれを受け取るかすみ。

「いえいえ、皆さん頑張ってますし」

「少しぐらいの噂話仕方ないですよね」

笑顔の準太から発せられた言葉にかすみは固まった。

「はは……」

これがひきつり笑いというものだろうか。対して奈緒子はマイペー
スに紅茶を飲みつつ、かすみのクッキーを勝手に頬張っている。

「あ、噂をすればですよ」

突然、準太は先の方にある入口の方を見上げて言った。

「例の生存者」

ドアが開き、高遠隼也の眼に入ってきた光景は異質な空間であつ
た。隼也は、青の蛍光灯で照らされた広い室内を高い階段を降りな
がら見下ろした。入口の手前側では部屋の両側に2列ずつコンピュ
ーターがずらりとならび、制服を着た大勢の人々が画面に向かって何
やら作業している。

「ここは情報分析部。俺たち組織が世の中について調査する場所だ
よ」

物珍しそうに見ている隼也の方を向きながら白衣の男が言った。

「世の中……?」

「まあ、詳しいことは後で説明するから」

階段を下り終わると、ふたりはコンピュータに挟まれている床をま
っすぐに歩いた。その時、隼也は作業をしている大勢のうちの一人
の視線に気づいた。作業をしつつ、隼也たちの方をちらり、ちらりと
覗き込んでいる。やがて、歩いて行くうちに、一人だけではなく、

周囲の人間殆どが自分たちの方を見ていると、解かった。

「あの子が」

「珍しいな」

「何があっただらうね」

周りの人間が少年の方を見てコソコソと会話をしている。少年は話の中心が自分だということに気付き、嫌悪に顔をゆがませ、俯いた。

「気にしない方がいい。みんな悪い人たちじゃないんだ」

少年の様子に気づいた男が、速度を落として隼也の隣に来て、言った。

「ただ、ちよつと 仕事柄、野次馬根性が強いだけなんだよね」

「…そういうのが、一番気に食わないんだ」
ぼそり、と隼也は発した。

「まあ、もう少しの辛抱だよ。ほら」

男に言われ、隼也が顔をあげると、5mほど先にドアらしきもの存在が確認できた。

ドアの手前に着くと、白衣の男はドアの左にある赤いボタンを押し、言った。

「文江さん、明須賀あけすかです。高遠隼也君、連れてきました」

すると、その声を受け、ボタンの上にあるインターホンが反応した。

「…明須賀君、支部長と呼びなさいって言っているでしょう!」

「俺のことも灯市って呼んでもいいんですよ」

「呼びません」

声の主はきつぱりと断言した。

「つれないな」

「大体、あなたからは私への敬意が感じ取れないのよ!もう少し立場を考えなさい!」

「年齢の問題ですか?」

「違う!」

女性の大声が響き渡る。この流れがいつまで続くのか、と不安に

なつたのだろうか。隼也は明須賀の方をきつい眼差しで見やった。
「…あー、とりあえず、隼也君を待たせてるんで入れてもらっていいですか？」

隼也のまなざしに気づいた明須賀がインターホンの声の主を訪ねた。
比較的眞面目な調子で。

『…そうね、とりあえず、入りなさい』

声の主の咳ばらいが聞こえた後、ふたりの眼の前の頑丈そうな扉が両側に開いた。

ドアの向こうには薄暗い廊下が続いていた。

「どこまで嚴重なんだよ…」

あつげにとられた様子で隼也が呟く。

「念には念を。うちのモットーなんだ。大丈夫。すぐ着くから」

そう言われ、少年は白衣の男の後ろをついて行った。廊下は一本道のみで分岐はない。目的地に着くまでの約3分間、ふたりの間に沈黙が訪れた。

やがて、光が洩れているドアの前に辿り着いた。すると、招き入れるように、ドアが両側に開いた。

「いらつしゃい」

白で明るく包まれている部屋には30代ほどの女性が座っていた。

「さあ、入って」

明須賀に言われ、おずおずと部屋に入っていく少年。

「あなたが高遠隼也君ね。私は観保守機関第19支部、支部長の丸まる谷文江たにふみえです」

そう言いながら、女性は隼也の方に歩み寄り、握手を求めた。

「み…ほり…?」

条件反射で差し出された手に握手しつつも、彼女から発せられた単語に疑問を抱く隼也。

『やっぱり、観保守みほりは仕事が早い早い…』

「！」

そう、彼はその単語を聞いていた。

「……あいつも言ってた」

「……『あいつ』って佐屋宗智生のことね？」

丸谷が静かに聞く。

「何なんですか……。あいつら。そして藍津も……！」

最初、虫が鳴くような小さな声だった少年の発言は徐々に力を増していった。その少年の様子を見て、丸谷は言った。

「そのことを説明するために、ここに呼んだのよ。高遠隼也君」

彼女はリモコンのボタンを押す。暗転。そして、先ほど通った空間と同じ青色が部屋を包みこむ。やがて、部屋の壁側上部から、スクリーンが降りてきた。

丸谷は机に自分の体重を預けつつ、立っている。

「まず、我々について説明します」

「我々、観保守機関はこの国、日本の監察者」

彼女はそう言いつつ、スクリーンの方を見やった。それにつられて、隼也もスクリーンへと視線を移動させる。

彼は思わず、眼を見開いた。スクリーンには様々な人々の生活が次々と映し出されていた。政治家、軍隊、そして、一般の人々までもが映し出されていた。

「我々は日本の秩序を守るため、異端の者の行動を監視する、『異端の番人』なのです」

異なるモノ？

「これは一体……」

隼也は目の前に映しだされた映像を、ただ、茫然と眺めていた。

「これは我々の機関がこの国を統制するために全国各地に仕込んだカメラの映像よ」

丸谷は呆気にとられている隼也を見ながら言った。

「仕込む……？！それって俺たちの生活を常に観察しているってことかつ？」

映像の中には、国会での討論や軍隊の訓練風景といった、隼也には普段馴染みのないものだけではなく、大きなビルが並ぶ街の光景、さらに、談笑しながら食事をとっている、ありふれた一般家庭の映像すらも入っていた。

「まあ、こんな映像を見せられたら、あなたのように警戒心を抱くのも無理はないわね」

少し苦い笑みを浮かべながら、丸谷は言う。

「確かに、政治や防衛関係……そして、公的な場所には我々は割と節操無く監視をさせてもらっています。ただ、勘違いしないでほしいのは、これは国の上層部も把握しているってこと。そして、映し出されている家庭については、その家庭の許可をしっかりとらっているということ」

「……？家庭が自分の監視を許可……？」

理解できない、といった面持ちで隼也は眉間にしわを寄せながら疑問を呟く。

「さつきも言った通り、我々『観保守』の役目は『異端の者の行動を監視』すること。政治や軍隊、街の監視さえ、その目的のための手段にすぎないの」

そう言うと、丸谷は映像を止め、部屋の明かりをつけた。

「隼也君、あなたは佐屋宗智生、藍津澗たちの戦闘を見たわね？
彼女たちの戦闘力・戦闘スタイルは普通の人間と比較して驚異的な
ものだったでしょう？」

隼也の顔が陰る。腹の中に無理やり押し込んだものが溢れ出てきそ
うな、そんな不快感が彼の顔に見て取れた。そして、彼は小さく「
…ええ、まあ」と呟いた。

そんな彼の表情に何か悟ったか、彼女は一瞬複雑そうな表情を見
せ、そして、瞬時に、元の面持ちに戻した。

「彼女たちは、古くから存在してきた特別な流派、機関で訓練を受
けているの」

「…？特別…？」

「古くは弥生…新しいものでも平安から…。混沌とした歴史を繰
り返す中、この国に、様々な思想をもった者たちが誕生してしまし
た」

「この世の神秘に影響を受け、真理を追究しようとする者…たくさ
んの戦いの中で、強みを極めようとする者…」

「それぞれはやがて、大きな集団を形成し、各々の目的に沿って、
時には利用し、利用されながら、この国の歴史の中で、多大な影響
を与えていきました」

「しかし、開国の時代へ導かれるにつれて、権力者たちはそのよう
な強大な影響力を持つ集団たちに危機感を持ち始めました。このま
ま、それらの集団の行動を認め続けていると、内政が安定せず、国
内外において、混乱が起き、この国の近代化は大幅に遅れ、平安は
もたらされないだろう」と

唐突な話に困惑している隼也を尻目に、さらに、丸谷は続ける。
「そこで時の将軍、徳川慶喜はそれぞれの組織にある提案をしまし
た。まず、相互干渉、各々の組織は組織同士で手を組んだり、争
いごとを起こしたりしてはいけない。これは国家転覆の恐れからで

す。そして、次に、組織の存在をこの世に知らせてはいけない。

巨大な組織が邪魔だからといって、組織自体を解体することはつきりいって不可能でした。組織があまりにも大きすぎたからです。彼らを否定することは、それこそ、確実に国を破滅へと至らしめる愚行だったでしょう。」

「しかし、この存在が他の国へと知られると都合が悪い。何故なら日本は、国際社会において赤子のようなもの。赤子は大きな存在に好意を見せねば生きていけません。ところが、我が国に存在した組織には武術に長けている集団もあり、それが他国に脅威と写り、敵意と捉えられる恐れがあったのです。」

「そのため、慶喜公はそれぞれの組織たちにある条件を出しました。『組織の存在は永久的に認め、保護し、政治への介入も許可する。しかし、あらゆる面における社会において、その存在を知られてはいけない。侵した場合、嚴重な処罰が下る。』と。」

「そして、組織たちが約束をちゃんと守っているかどうかを監視するための機関として結成されたのが、俺たち『観保守』ってわけ。今まで静かだった明須賀が陽気な声で割り込んできた。

「…まあ、そういうわけです。先ほど映し出されていた家庭も、組織に属しているので、差支えない部屋だけ監視させてもらっているの。」

明須賀の行動に不服そうに眼に皺を寄せたが、間違った言動はしていないので、説教する事が出来ず、それがさらに不満である、といった表情で丸谷は続けた。

「幸運だったことは、当時の組織の長たちが聡明で物分かりの良い、平和主義者ばかりであったということ。このままではこの国の未来はない、と悟っていたのでしよう。こうして、組織たちと国家の間に密約が結ばれ、組織の存在は時が経つにつれ、都市伝説となり、やがて忘れられ…戦が起きた時も、彼らは相互不干渉の掟

を挙げ、表舞台上で活躍することなく現代まで至りました」

言い終えると、丸谷は浅く深呼吸をした。そして、鋭い眼光で隼也を見つめ直した。

「だけど、1年前、長年続いていたこの状況を揺るがす、最悪の事態が発生したの」

「…最悪の事態？」

丸谷の真剣な面持ちに、隼也は少したじろぐ。

「…組織の一つが、ある者の襲撃によって、一夜にしてほぼ壊滅状態に陥ったのよ」

「…しゅっ…げき…」

ゴクリ、と隼也はつばを飲み込む。

「組織の名は『佐屋宗』^{サヤムネ}」

「…っ！！」

隼也の身体が、一気に強張る。

「『鞘』を『胸』に…その名の通り、『佐屋宗』は古より、剣の技術を磨きあげてきた流派だったの。その戦闘センスはとてつもなく普通の人間が10人向かってきても、佐屋宗の人間にとって、柔軟体操にもならない、と言われたほど。師範・門下生は一年前には200人を超えていたわ」

「…そんな戦闘集団が一夜にして、壊滅した…？」

恐る恐る、といった様子で、隼也は呟いた。

「佐屋宗の屋敷は跡形もなく焼きつくされていて、当機関も始めは大変な混乱状態に陥ったわ。我々の知らない間に他の組織が抗争の計画を立てていたのか？だとしたら、一体どの組織が？処罰はどうするか…という具合にね。だけど、数日後保護された佐屋宗の生き残りの証言によって真相が判明したの」

「真…相…」

「夜、佐屋宗に火を放ち襲撃したのは他でもない、佐屋宗の次期当主候補、佐屋宗智生だったのよ」

「…なっ！！」

その言葉からもたらされた驚愕によって、隼也の眼は大きく見開かれた。

「それだけじゃない。さらに佐屋宗智生は襲撃のあった夜の日の午前に、用意周到な計画で…翌日まで明るみにならないように…」

「彼女が通っていた学校で、当日休んでいた数名を除いた全教師・全生徒を殺害していたの」

高遠隼也の顔から血の気がみるみる引いていった。彼は腕を押さえつけている。自身の身体の震えを止めようとしているのである。それを皮切りに、各地の学校で佐屋宗智生は学校襲撃を繰り返しているわ。今回のように、彼女の意図・目的は現在のところ不明。観保守機関は全国各地に支部を置き、およそ一年の間、組織の監視者として、佐屋宗智生を追っているの」

「…な…」

「…あの…藍津…藍津澪は一体…」

数秒、啞然としたような表情を見せたが、気を持ち直し、隼也はずっと心に引っ掛かっていたもう一人の少女の存在を問うた。

「…藍津澪はここ、観保守機関第19支部で働いていた元工作員の少女よ」

「…！…藍…津…が…観保守？」

「2年ほど前に、一身上の都合ということで、機関を脱退、行方をくらましていたの…おそらく、辞めた时期的に佐屋宗智生の情報は入ってなかったのね。もし彼女の存在を知っていたら、発見した時点で、まず、観保守に連絡をよこすだろうから…」

言い終えると、丸谷は悔しそくに自身の下唇をかんだ。

一方の隼也は衝撃のあまり、言葉を発する事が出来ない。佐屋宗智生が連続殺人犯で…藍津澪がこの国の監視者で…普通の学生で…何を言うべきか、わからない

「…待ってくれ、襲撃された学校は全部で何校なんですか？」

少しでも頭の中を整理しなければならなかったのだろうか。力
無い声で隼也は呟いた。

「これまでに15校ね」

「それだけの学校の生徒たちが殺されていたら、さすがに問題にな
るはずだ。だけど、俺はそんな事件知らないっ……」

「それは……」

丸谷は言葉を続けるのを躊躇した。

『だが、引き続き生存者の搜索を……』

突然、部屋の隅に会った小型のテレビから女性アナウンサーの声が
聞こえてきた。どうやら、明須賀が電源をつけたらしい。彼は手に
リモコンを持っていた。

「ちよつと……明須賀君っ」

明須賀は、咎めるような口調で言う丸谷を気にも留めないといった
様子で、自線をテレビに残したまま対応する。

「ちよつどこの時間、ニュースやってるんでちよつどいいと思っ
たんですよ。いちいち、口で現状説明するより、現実見せた方が早
いと思いますよ?」

「でも……」

「文江さん、このことはいずれ彼に知れることです。それに彼は真
相を早く知りたがっている。これが一番最良の選択だと思いません
か?」

静かに、そして、真剣な眼差しを伴って、明須賀は丸谷の方を向い
た。

「一体何がテレビに……」

2人が何を議論しているのか気になったのか、隼也はテレビの映像
に注目した。次の瞬間、隼也にとって見慣れた風景が彼の眼に映し
出された。

それは、彼がいつも登校していた校舎があつた土地辺りの上空風
景。しかし、校舎が存在していたはずのその場所には、建物らしき
ものは見当たらない。映像が切り替わると、無数のコンクリートの

塊が転がっている様子が画面に映し出された。

「しかし、完璧なセキュリティシステムが、今回のような悲劇につながってしまったわけですが、森倉さん」
画面がスタジオに戻り、女子アナウンサーが隣にいるコメンテーターらしき中年の人物に話しかける。

「そうですね、本来生徒たちを守るはずの玄関を施錠するシステムが、このように、火事が起きた時に逃げ遅れる原因になるとは、本当に皮肉ですよ」

「セキュリティシステム…？こいつら何言ってる…」
啞然とした面持ちで隼也は画面に見入る。

「システムが最近導入されたばかりで、それにきちんと対応した避難マニュアルがこの学校では作成されていなかったということが大きな要因でしょうね」

「な…なにを…俺の学校にはそんなシステムなかったぞ！」

「隼也君、落ち着いて」

明須賀が静かに言いきかす。

「だって…こいつら、さつきから意味不明なこと言ってる…」

「これが現実だ、隼也君」

リモコンのボタンを押し、明須賀はテレビの電源を切った。

「ちっ違う…！学校では火事なんて起きてない！起きるわけない！
だって…みんな…みんな…」

そこで、彼の言葉が数秒止まった。苦しそうな面持ち、受け入れがたい、^{リアル}本当、だが、その時は来たのだ。彼が真に現実を受け入れるその時が。

「藍津やタケ…みんな、佐屋宗に殺されたんだ！」

そう叫ぶ隼也を、丸谷は少し悲しそうな表情で、明須賀は感情を表さず、ただ静かに、見つめていた。

「…だから…火事なんて起きるわけないんだ」

言い終わると同時に力なく、うなだれる隼也。

「そう。真実はそうだ。君の言った通り。だけど現実が違う。現実では実験室からの発火およびセキュリティシステムの不適切な操作によって校内の出入り口がすべて封鎖されてしまったことが原因となり、登校していた全教師・生徒が逃げ遅れて死亡という扱いになっている」

明須賀は先ほどと同じように淡々と続ける。

「先ほども言った通り、我々は組織を監視し、組織の存在が明るみになることを防がなければならない。言っている意味が解かるね？」

「まさか……」

隼也が顔を上げる。

「それがたとえ、異端中の異端の存在であっても、絶対に外部に漏れては駄目なんだ。他のケー・スたちも火事、地震、交通事故……他にも事件日時や場所を工作したりして、隠蔽している」

「……なんだよ……それ……そんなに国の体面が大事なのかよ……っ」

「殺された奴らのことはどうでもいいのかよっ！」

「こらえきれない怒りをぶつけるかのように明須賀を怒鳴る隼也。何とも言えない面持ちで丸谷は隼也を見ている。

「どうでもいい」

「!?!」

隼也と丸谷、2人にとって予想外の言葉が返って来た。

「な……」

弁解や何やら並べてくると思ったのだろう。隼也は瞬時に怒るといった行動をとれなかった。

「明須賀君……!」

眉間に皺を寄せ、丸谷は明須賀の方を見やる。明須賀は丸谷の方を見ずに、隼也に語りかけるような口調で言った。

「どうでもいい……確かに、国を運営している、組織の存在を知っているトップにはそう思っている奴もいる。ただ我々……少なくとも、

この、観保守機関第19支部の人間たちはこれ以上の犠牲と混乱を出さないよう、必死になって事件を解決しようとしている。犠牲が出ているからこそ、監視者である我々は、犠牲者が過ごしていたかった、この国の平安を守っていかなければならないんだ」

「明須賀君」

数秒の沈黙が流れた。それは、数秒の間訪れただけであつたのに、もつと長く、何時間にも感じられるような、奇妙な沈黙であつた。「でも」

隼也が言葉を発する。明須賀の言葉は理解できているのだろう。彼なりに納得もしたのである。しかし、それでも何かを言わなければならぬという感情が隼也を焦らす。

隼也の複雑な表情を読み取つたのか、明須賀は出会つた当初に見せた朗らかな笑顔で、言つた。

「ま、100%信じるとは言わないよ。隼也君がこれから俺たちと接していく中で見極めていくと良い」

「…わかつた」

静かに、しかし、先ほどより少し落ち着いた様子で、隼也は言つた。

2人の様子を見て、丸谷はふうつと息を漏らす。

「まだ話したいことはいろいろとあるけど、今日はここまででいいでしょう。詰め込みすぎるのも良くないわ」

「そう言えば、隼也君晩飯まだ食べてないよね。食堂に行こうつか」

「あ…いや、俺、晩飯の時間ならもう帰らなきゃ。家族も心配してるし」

「え…」

「あ」

隼也の発言を聞いた途端、明須賀と丸谷、2人は顔を見合わせた。

「そうね…大事な事を言い忘れていたわ」

「え？」

「えーっとね、さっき、『登校していた全教師・生徒が逃げ遅れて

死亡という扱いになつてゐる』つていつたよね？」

明須賀が意味深に隼也に語りかける。

「ああ……」

「その中には君も入つてゐるんだよね」

しばしの沈黙……

「……はい？」

「組織の存在は公にしてはいけない。つまり、組織の存在を垣間見た隼也君も、こつち側に来てもらわなきゃいけないんだ」

「高遠隼也君」

明須賀のあやふやな態度にしびれを切らしたのか、丸谷が割り込んできた。

「……はつきり言います。あなたは本日13:55分を持ちまして、日本社会において死亡扱いとなりました。今後はこの観保守機関第19支部で生活してもらいます」

「な……何言つて……」

「すでにご家族には隼也君が死亡したことは通知済みです、以上」

「ちよつ……ちよつと！……なんだよ！それ！あまりにも横暴じゃないか！」

「落ち着いて、落ち着いて！隼也君」

「これが落ち着いてられるか！変な組織なんかのために死んでもいないのに殺されてたまるか！」

隼也は、なだめる明須賀に苛立ち、肩におかれた手を振り払つた。

その直後、少年の動きがいったん停止した。

「な……」

少年が目線を下におろすと、首に細い注射器が深く食い込んでいた。

「ごめんねえ。あまり、こつちいうことはしたくないんだけど。あ、これはただの強力な睡眠薬だから安心して」

言葉とは裏腹に申し訳なさなど微塵も感じない笑顔で言う明須賀。そんな明須賀を、しょうがない奴、というような眼で見やる丸谷。

「これ……2回目……」

隼也は、そうつぶやくと床へと崩れていった。・瞼が下り、深い闇へと飲まれていった。

しかし、彼が眼を覚ましたところで、そこに光があるのかどうかは誰も知らない。

break time

ガラガラ：青年はワゴンを押して部屋に入ると、積んであったポットから熱い紅茶をカップに注ぎ始めた。

「ん…」

高遠隼也は陶器があたる音で目を覚ました。眼に入つて来たのは白い天井。数秒、眺めた後、状況を把握したようで、彼は、ハツとしてベッドを囲む布を引いた。彼の身体は永らく自由を失っていた鳥が籠の中から放たれた時のように、勢いよく動いた。

「おい、お前…！」

彼が大声で罵るうとした矢先に捉えたのは、彼が見知らぬ人物であった。

「あ、起きた？おはよう」

カップを手に、青年はにこやかに笑った。

「お腹すいただろう？おかわりもあるからいっぱい食べると良いよ。パンだけど大丈夫かな？」

どうやら、彼は高遠隼也に食事を配膳しに来てくれたらしい。青年は食事の載った盆をベッドに備え付けた簡易テーブルの上に置きながら言った。

「ああ…いつも朝食パンだから大丈夫…です」

隼也は自分より二、三歳年上に見える長身の青年をチラツと見ながら返事した。

「あはは、無理して敬語なんて使わなくていいよ。よく老けて見られるけど、俺、実際は君と一学年上しか違わないらしいし、この皆、大体俺より年上だから、新しい友達ほしかったんだよね」

「はあ…」

隼也はスープを口に含みながら相槌を打つ。

「しかし、君も災難だよ。昨日、昼飯と晩飯食べれなかったん

だろ？」

近くにあつたパイプ椅子に座つた準也が言う。

「……!? 昨日!?!」

準也は、青年が放つた言葉に、思わず声を上げた。

「あ、自己紹介まだだつたね、俺、市村準太。君のことはもう、基地内の噂になつてゐるから大体知つて。」

「あ、あの昨日つて、!?!」

準也の言葉を聞いてなかつたのか、勝手に自己紹介を始める青年に、焦つてストップをかける準也。

「……? ああ、ここ窓無いから時間把握しにくいよねえ。今は、A M 7:09。もう朝だよ。」

天井近くに掛けられていた時計を指さしながら、説明する準太。その指を眼で追う準也。

「……もう……朝? ……!! あんの、野郎!!!」

茫然としていた準也は、呟くような声を徐々に荒げながら、混乱する。
「あの野郎……ああ、灯市さんのことね。あの人もえげつないよねえ。睡眠薬注射されたんだつて?」

「……ついでに痺れ薬もな!!!」

ははっ、と軽く笑う準太に対して、準也はツツコミを入れるように少々発狂気味の声で喚く。

「……だけど、薬打たれてなかつたら埒が明かなかつたんじゃないの?」

「……!」

準太のその言葉に、彼は言葉を詰まらせる。

一人の少女の死

一人の少女の赤

一人の少女の暴言

一人の女性の暴露、そして宣告

「ま、いきなりたくさんの方がいると大体の人間は混乱するから、仕様が無いよね」

眼の前の少年をフォローするかのようにならぬと、準太は言う。準也の反応は見られなかった。

「…それより、決心はついた？」

そんな様子を見て、準太は一呼吸置いてから俯き加減の準也に訊ねた。

「…何の」

食事を再開しつつ、力無い声で彼は答える。

「ここで一生暮らすこと。親や友達から離れて。観保守の情報隠匿のために」

「…」

その言葉に、パンをちぎっていた準也の手が止まった。

「あなたは本日13:55分を持ちまして、日本社会において死亡扱いとなりました。今後はこの観保守機関第19支部で生活してもらいます」

「…本当に、勝手な話だよ。こつちの意思無視で勝手に殺されて、最悪な気分だった。…でも、昨日散々暴れてわかった」

「…これは俺が何かを訴えたからといってどうにかなるわけじゃないってこと。俺がいくら暴れたって、昨日のように薬を打ったりして無理やりにもここに閉じ込めるつもりなんだろう？」

準也は準太を見据えて言い、それから、手に持っていたパンをちぎり、再び口に始めた。

「決意や覚悟なんていう次元の話じゃない。俺の意思とは無関係なところで進んでいく。それなら、抵抗は無意味で無駄なだけだ」

「だから、大人しく従うと？」

穏やかな表情で準太は目の前の少年に聞く。

「それ以外に俺がすべき行動が思いつかない」

淡々と、昨日の暴走が嘘のように、淡々と、高遠隼也は問いに答えた。

「家族は？もう一回会いたいと思わない？」

「家族は…嫌いじゃないけど…正直そんなに固執してないし」

「ふーん…君みたいな人もいるんだね。世の中」

少し物珍しいように、準太が言った。

「けど…智生ちゃんにはお気に召されなかったんだ」

ぼそり、準太が言った言葉に、隼也は瞬時に反応した。

「今…なん、て？」

言葉に詰まりながら、準太に問いかける。

「？君の学校襲った佐屋宗智生。準太君、智生ちゃんに殺されかけたんだろ？」

「ああ…それが？」

もちろん、彼は「それがどうした？」と言いたかったわけではないだろう。ただ、準太がこれから発し得る情報に、ある種恐ろしい一つの推論を思い浮かべたのかもしれない。そして、それを、恐る恐る彼に確かめたかったのかもしれない。

「だから、それは智生ちゃんが君のことを気に入らなかったからだろう？」

市村準太は悪びれた様子もなく、何のことはないと言った。軽い調子で言った。

「俺が…佐屋宗のお気に入りにならなかったから殺されかけただと…？」

隼也の額に汗がにじむ。彼は強くこぶしを握りしめていた。震えながら。

「待ってくれ。奴は俺以外の生徒…その日学校にいた生徒、それ

から教師全員を殺したんだぞ…？そんな理由は…」

ありえない。彼はひきつった笑顔で準太を見やる。準也の様子を見ながら、準太はハツとした。

「…あー、もしかして、まだ丸谷さんに智生ちゃんたちの行動内容について全部聞いてなかった？」

しまった。とでもいうような面持ちで準太は言った。

「行動…？俺はただ、あいつらが全国で殺人を繰り返しているってことしか…」

「ああ…それだけ…か」

苦笑いしながら準太は頭を掻いた。

「どういうことだ？」

いぶかしむように準也は彼を見やる。

「…まあ、言っちゃっていいか。どうせ、もう仲間だしね」

準也は、一瞬、「仲間」という言葉にムツとした表情をしたが、反抗的な態度はとらなかった。

「佐屋宗智生はね、学校に潜入してから事件を起こすまでの間、学校にいるすべての人間を『審査』しているんだ。目的はわからないけれど、恐らく、自分の気に入る世界を作るためだと、俺は思う」

「しん…さ？」

準也は呆然とした面持ちで口を開く。

「そんな…全校生徒…教師までも…」

その時、準也の脳裏に、ある放課後の佐屋宗智生との会話が過ぎった。

『ウチね、今日までに学校の全生徒、全教員、全職員さんと話をしたんだ』

『早めに、その人がどういう人か知りたいんだ。時間が無いから』

言っていたのだ。彼女は、始めから少年に、行動を起こす前に、行動の起因の一つを。

「まさか…あれは…そういう意味…」

少年は腹から何か湧きあげてくるものをこらえるように、口に手をあてた。

「思い当たることがあるのかい？まあ、その『審査』で不合格だった人を殺していつてるってわけ」

重みの無い口調で準太は説明する。その言葉に隼也は混乱した様子を見せる。

「…し…審査って…そんなのおこがましい。おこがましすぎるだろうっ…？そんな勝手な独断で、理由で！皆殺されたのか…？第一、人間の本质なんて見抜けるわけがっ…」

「確かに、そう言う人もいるね……だけどさ、隼也君」

「…？」

準太が静かに続ける。

「人間の判断なんて、皆自分でやってるよね？それで勝手に嫌いになつたり、好きになつたり、自分に都合の良い環境だつて作りたがる。つまりさ、彼女もそういう人なんだよ。勝手に人を『審査』して、勝手に判断して、自身の意思に従い、行動している。それだけのことなんだよ」

ソレダケノコト。

「…間違つた判断をされて、殺された側はどうなる…！？しかも、他人の我がまままで…不条理だ！」

あの、赤い放課後

生ぬるい、風

帰宅する生徒たち

微笑んでいる、少女

思い出したくない
全てを 否定する

「たしかに、殺された側にとってはね。だけど、殺した側はそうじゃない」

穏やかな表情を崩さず、青年は言った。

「行動を起こす者なら、誰しもそれを当然だと思って行っただろう？後悔する人もいるけど、それこそ、ある意味愚かだと俺は思うね」

「っ……」
隼は何か言ってやりそうな表情をしたが、言葉が出てこないようであった。

「それに……少なくとも智生ちゃん以外の人も人間を見る目があると、俺は思うよ」

シリアスな話になんて少し疲れたのか、準太は椅子に座ったまま背伸びした。

「……？市村さん、なんでそこまで……？」

これまでの彼の発言は、佐屋宗智生の恐慌を擁護しているようにも思える。高遠隼也は、不審に思ったのだろう。

「市村『さん』はいらないよ、隼也君。市村、で良い」

爽やかに、市村準太は言った。

「……はあ」

彼の毒毛の無さにやられたのか、力が抜けたように隼也は答えた。明須賀灯市と対するときは、敵意むき出しだった隼也も市村に対しては、噛みつくような態度はとらなかつた。とれなかつた。

「ふふ、確かに、俺の発言は佐屋宗智生寄りに思えるよね」

隼也が思ったことを予測したのか、少し可笑しそうに、準太は言った。ぎくり、と隼也の顔が僅かに強張る。

「俺もね、佐屋宗智生に襲撃された学校の生徒の一人なんだよ」

「え……!？」

衝撃の告白、準太は続ける。

「ただ、俺と君が違ふ点が一つ。君は運よく、殺される前に佐治さんたちに助けられた。俺は…智生ちゃん自身が、殺さないと決めた。」

「…つまり、それは…」

隼也は、これまでの準太との会話により、話の展開に早くも順応してきたのだらう。驚きの表情を一瞬見せた後、落ち着いた表情を取り戻し、慎重な声で、言った。

「『審査』に合格した…ってことか？」

「そんなことを彼女は言ってたね」

そうなると、隼也が疑問に思うことは一つだ。

「一体どうして…？」

少年の質問が予測できていたかのように、彼は少し微笑んだ表情で答える。

「…詳しいことは教えてくれなかったけど、そうだな、強いていうなら、俺がこの世界に『良くも悪くも影響を及ぼさない』かららしい」

「…？どういうことだ？」

「俺と生活をしてれば、少し賢い君はヒントを与えたからわかるかもしれないね。まあ、理由だけを分かりやすく言つと、俺は『世界に居ないようなもの』ということになるわけだ。だから、あちらさんにも関係ない。居ても居なくてもどうでもいいってこと」

爽やかな表情で、明るい声で、自虐的な事を言っている。

「…だから殺す理由もない、と？」

少し、具合が悪そうに隼也が訊ねる。

「そういうこと！」

屈託なく微笑む準太。

「ちなみに、俺達みたいなのはイレギュラー。大抵は観保守の戦闘員が現場に着く前に皆殺されている。君が助かったのだって、元工作員の少女が頑張ってくれてたからだ」

その言葉を聞いて、手を、再び、強く握りしめる。身体を強張らせる。

「藍津……」

呟くように、自分以外の人間には聞こえないように、少年は発した。

「？何か言ったかい？」

準太が訊ねる。

「いや……あ、もう俺お腹いっぱいだから、食器片付ける」

「え？もう良いの？あんまり食べてないじゃん」

「いいんだ……あんまり食欲ないし」

食器の載った盆を持ちつつ、俯き加減に準也は言った。

「そうか……じゃ、ワゴン片付けたら行くところあるから、ついてきて」

「？……何処に？」

ワゴンに乗っている鍋などを整理しながら、準太は言った。

「これからの君の居場所へ、だよ」

庶務部 A ?

隼也は、市村準太に導かれるがまま、部屋を出た。昨日から身につけたままの高校の指定ワイシャツとスラックスからは、汗の乾いた臭いが僅かに漂った。

彼がこの廊下を見るのは二回目である。正確には四回目の通行なのだが、記念すべき最初の一回目は気絶状態で学校から運搬され、三回目においては、明須賀灯市によって薬を打たれ、これまた気を失った状態で部屋へ運ばれたため、記憶には残っていない。

「また青い部屋に行くのか？」

昨日と同様静まり返った廊下を歩きながら、高遠隼也は自分の目の前を歩く青年に訊ねた。

「青い部屋…？ああ、情報分析室のことか。ううん、昨日は支部長が直々に隼也君に説明したかったみたいだから、支部長室につながるあそこを通らせただけ。今日行くのは違うところだよー」

「俺から事件のことを聞いたりする用事か？」

少年はぶつきらばうに放つ。

「それも違う。昨日は、隼也君にとって衝撃的な内容の情報を聞きすぎただろう？だから、佐治さんが、しばらくは君に気分転換させろつて。外には出せないけどね」

「佐治…？」

「あれ？会ったこと無かったっけ？多分隼也君を運んできたの、佐治さんだと思っただけど」

再び振り返り、そのまま背の方向に歩きながら準太は言う。

「…」

数秒考え込む隼也。そして、瞼が大きく開いた。

「あ…もしかして…作務衣着たおっさん？」

隼也は眉間に皺をよせ、話し相手を見上げながら確認した。

「うん。そうそう！何か話した？」

「……」
高遠隼也と佐治と呼ばれる男との間に起こった出来事。まず最初に、佐治は隼也がいるにもかかわらず、彼の方へ向ってロケット弾を撃ち込んできた。そして、この部屋で初めて目を覚ました時に、騒ぎ立てた少年を、脅し、半ば強制的に黙らせた。

「……」
例え理由があつたにしても、相手に抱く印象は良いものではないだろう。隼也は引き続き眉間に皺を寄せたまま、黙っていた。

「まあ、多少面倒くさがりで破天荒なところあるかもしれないけど面倒見はいいから、何かあつたら相談すると良いよ」

「はあ……」
エレベータの前に辿り着くと、準太は下の階へ行くボタンを押した。

「……」
「どつした？」
隼也がエレベータのボタンを黙って見つめているのに気づき、準太が訊ねる。

「いや……大したことないんだけど、ここって何階なのかな、と思つて。窓がないから判らなくてさ」

エレベータに入りながら、数字が記されていないボタンを眺めつつ、隼也は言った。

「あー、なるほどね。ここは地下にあるから窓は設置されてないんだよ」

そう答えると、青年は縦に羅列されている数個のボタンの中から一つを押した。

「地下にあるのか？」

「そりゃあね、堂々と地上に姿を見せるわけにはいかないでしょ。敵にすぐつぶされちゃうよ」

準太はハハツと軽い笑いを付け足し、そして続ける。

「もちろん、佐屋宗以外にもね」

彼の意味深にとれる台詞に、隼也は準太の顔を数秒見、それから何

事もなかったようにエレベータの正面を向いた。

「はい！今日君に用がある部屋はここです」

大げさな身振りで左手を白いドアの前に向ける準太。

「えーと…『庶務部A』？」

国家の秘密の組織には似つかわしくない語句がドアの上側に見受けられた。

「そう！君にはここにいる間、観保守関係の庶務をやってもらうことになるんだ」

にこやかに準太が言う。

「…え！？おっおお俺が！？何で？それが気分転換っ？」

突然与えられた任務に状況把握のため数秒沈黙した後、隼也は年相応の動揺を見せた。

「なんでって…隼也君、君はここにいる間、ご飯を食べたり、風呂に入ったり、温かい布団で寝るわけだろう？」

「全て何もしないでタダで済ます気なのかい？」

「君は戦闘能力零だし、情報に関する知識も乏しいだろ？ここしかないよ」

悪い冗談だね、とでもいう風に、話す準太。

「それに働くっていうことは、やりがいが実感につながる人間にとって最強のビタミン剤だよ」

「…いついや！？でも、俺には関係ないよな？勝手にここに拉致られているだけだしっ」

準太のもっともらしい理論にうっかり吞まれてしまいそうになる隼也だったが、慌てて反論した。

「しょうがないよ、それも運命だ。世の物事っていうのは88パーセントが自分の意思とは関係ない不可抗力で成り立っているようなもんだよ。君だって言っていたじゃない。なら、俺らにできるのはその時に与えられた選択肢を選ぶことだけ。今回の選択肢は一つ

しかないんだよー」

「…っで、でも…」

納得のいかない隼也の背中を押しながら、準太はドアのノブに手をかける。

「大丈夫、大丈夫。仕事って言っても、軽い雑用だし、難しくないし。寧ろ癖になるからっ」

「そういう問題でもないし…」

いや、でも、癖にはならないと思う、と準太の方に顔を向ける。

「タダ飯食つといて心の良心痛まないほど君は人間やめてないでしょうっ？」

「そ、それは…」

「まあ、ボランティアだと思えばいいよ。さあ、ドア開けるよー」
すっかり準太のペースである。隼也の神経を逆なでした明須賀も彼と同じような能天気な性格であった。しかし、この、市村準太に隼也は逆らえない。逆らわせない、明須賀とは別の何かがあるのかもしれない。

「失礼しまーす」

ドアが開かれた。決して広いとはいえない部屋に、ズラリと、柵が押し込められている。中央には数個の机。どうやら、昨日の情報分析室とは違って、大人数での作業はしていないらしい。

「あら、君が生き残った子お？」

不意に、部屋の奥の方から少々ハスキー気味の声が聞こえた。

隼也が視線を隅に位置する机の方へ向けると、50cmほどの高さがある紙の山の向こう側に、座っている褐色の女が確認できた。

「ふーん。ま、かわいい坊やね。私は島ヶ峰敦美しまがみねあつみ。敦美さんって読んでね」

島ヶ峰は携帯を片手に、青紫色の派手なロングヘアをいじりながら、色っぽい声で隼也に挨拶した。

「あ、ど、どうも…」

慣れない大人の色香にたじろいだのか、隼也はどもりながら答えた。

「敦美さん、隼也君は何処の席？」

「んー片付いている机ならどこでも…あ、あの席は先客がいるからそれ以外の机に適当に座ってー」

島ヶ峰は自分の席の向こう側にある、これまた部屋の隅の綺麗に整頓されているデスクを指さしながら言った。どうやら、この部署には2人しか所属していなかったらしい。

隼太は、3列に並んでいる向かい合わせのデスク群のうち、比較的紙が積み重なっていない部屋中央のデスクを軽く片付け、「ここはどうか」と隼也に言った。

隼也が隼太の用意したデスクに向かうと、隼太は口を再び開いた。「まあ、仕事と言っても、隼也君にやってもらうのは他の部署から持ってこられるデータを印刷したり、連絡を伝達したりするだけだから。難しい作業は本当、ないよ。暇な時は携帯いじったり、パソコンでゲームしていいし」

携帯に目を向けている、島ヶ峰が隼也の視界に入った。

「じゃ、俺は自分の部署に戻るから。詳しいことは敦美さんに聞いて。俺の部署はここから二階下の庶務部Bだから。何かあったら来てね」

「ああ…ありがとう」

これまで世話をしてくれた隼太に隼也は礼を言った。

「いえいえ。ま、今夜からは、観保守の寮に入れると思うから、お互いよろしく」

「寮もあるのか」

「うん。なんたって機密保持が大切だからね。職員全員、みんな寮暮らしだよ」

「…なあ」

隼也が聞いた。

「あんた…市村は、寂しい、とか、思わないのか」

少年の言葉に、市村隼太はキョトンとしていた。

「君は面白いね。さつき、隼也君は家族に固執はしないとか言っていたなかったっけ？」

彼の顔はおだやかに微笑んでいた。

「俺は、だろ。あんたはどうなんだよ」

「ここにいる大体の人はね、自分の仕事に誇りを持っている。

職場結婚以外で家庭を持っている人は少ないし、実際、寂しいと思うよ。それでも、使命感の方が重いから、頑張っているんじゃないかな」

一瞬の間。

「俺はそういうの良く解からないけどね。でも、今、ここにいるから、ここにいる自分の役割を果たそうとは思っているよ。それ以外に思うことはないかな」

隼太はそう言うと、「頑張つて」と隼也の肩に手を置き、部屋の外へと出ていった。

隼太が去った後、隼也は小さく息をつき、自分の席に座った。

「あの子も変わっているわよねー」

隼也の席の斜め左に座っている島ヶ峰が、ドアの方を見ながら言った。近くからだ、島ヶ峰は身長が高いことが判る。

「楽にしていなさいよ。その本棚に漫画もあるから読んだらいいわ」

島ヶ峰は部屋のドア近くにある棚を指した。

「は…はい」

「ふふ…緊張しちゃってかわいいわね。もう一人とは大違いよ」

「もう一人…」

「そう、愛想ないのよ。女なら大事なところだつて何回も言っているのに聞く耳持たず。真面目で堅物すぎるのよお。…そういえば、今日は遅いわね。いつも、時間前に来るはずなのに」

左手首の腕時計を眺めながら、島ヶ峰は言った。隼也は部屋の正面上部に掛けられている時計を見た。時計は8：30を指している。

「あ、そうそう此処は八時出勤ねー…」

「遅れました、すみません」

ガチャ、とドアの開く音がした後、少女の声が出た。その口調から、息を切らしていることが解かる。

隼也は声に導かれるように入り口の方を振り返った。すると、彼の眼には銀色に輝く髪が飛び込んできた。

「…っ！」

少年は眼を見開いた。

『死んで正解だったのよ・あんな奴』

入口に立つその少女は島ヶ峰から視線を戻し、正面に向き直ると、少年の姿をとらえた。彼女の鮮やかな緑の瞳が見開き、やがて、その瞳に嫌悪が滲んでいくのが隼也にも解かった。

庶務部 A ?

「なーんなのよ。この空気」

島ヶ峰がぼそりと言った。頬杖をつけながら眉間に皺を寄せている。

「陰気くさー」

今、この、広いとは言えない空間には三人の人間がいる。入口に対して垂直に並んでいるデスク群のうち、一番右の奥に位置するのは島ヶ峰の席。真ん中のデスク群、島ヶ峰よりの机には隼也。島ヶ峰には隼也の背中が見える形となっている。隼也は、周囲の机に積み重ねられていたのである。週刊誌を黙々と読んでいた。隼也はふと雑誌を読むのを止め、視界を上げる。隼也の視線の先には、左デスク群の壁側の席にはパソコンにデータを入力している銀髪の少女。彼は、少女からすぐに視線を外した。

「…別に他人なんてどうでもいいけど、ここまで険悪な雰囲気出されるとうざったいたらありやしないわよ」

不意に、少女のキーボードを打つ手が止まった。

「…じゃあ、どこかに外出してくればいいじゃないですか。いつも仕事してないんだし。こっちとしても清々します」

まるで、スケヤシャーで切断するように、少女は無機質な声で、ピシヤリといった。

「ちよつと、それが年上に対する言い方？」

ムツとして、島ヶ峰が反応する。

「本当のことじゃないですか。最後にキーボードに触ったの、何時です？」

パソコンのモニタから目をそらず、キーボードを打つ手も止めず、ただ淡々と少女は返す。

「馬鹿にしないことね」

藍津柚季を睨みながら勢いよく立ち上がる島ヶ峰。

「毎日私はタイピングゲームでキーボード打ってるわよ！」

沈黙。島ヶ峰の発言に反応する人間は皆無であった。

「…誰か何か言いなさいよ。ちよつとした冗談じゃない。ギャグじゃない」

おずおずと座り、足を組み直す島ヶ峰。深いため息をつく。

「隼也くん。きみも何か言ったらどう？」

少年の背中を見ながら島ヶ峰は言った。

「…言うことは何も」

雑誌から眼を放さずに、隼也は小さい声で返した。

隼也の反応に対して、島ヶ峰は先ほどより重いため息をついた。

「おーい。邪魔するぞ」

この灰色の時間が永遠に続くかと思われた時、重苦しい空間を打ち破るかのごとく、ドアの向こう側から大柄の男が現われた。

男の声を聞いた島ヶ峰の眼が輝きだし、素早く椅子から離れ、彼の元へと小走りで移動する。

「佐治ちゃんつ。会いたかったわあ」

「…」

ドアの向こうにいる佐治の姿を確認し、隼也は眉間に皺をよせ、簡単には形容しづらい表情になった。

「おお、少年。久しぶりだな。ちよつと来い」

身体にひつついている島ヶ峰を無視しつつ、少年を発見した佐治が声をかける。

何か作業をしていた銀髪の少女はその様子を数秒見、再びモニタへと向き直った。

「…」

無言のまま、少年は立ち上がり、男の方へ向かう。雑誌を机において。佐治は、初めて出会った日と変わらず、作務衣姿であった。精気が感じられない眼、だらしない無精髭、やる気の感じられない姿勢。何も変わらない。

「もう、佐治ちゃんつ。久しぶりなんだから、もうちよつと構っ

てよっつ」

「ここに来る用なんてそうそうないだろ」

首に腕を回しながら顔を近づけてくる島ヶ峰を冷静に手で制しながら、冷たく言い放つ男。

「はあ、相変わらずつれないんだからっ」

佐治の抵抗に諦めたのか、身を離すとため息をつく。

「用事って何ですか」

二人のやり取りが終わると、隼也は佐治に問いかけた。

「なんだ、顔が悪いな。少年。ちゃんと食ってるか」

「おかげさまで食べても食べても足りないよ」

質問からずれた男の返答に皮肉交じりに返す。

「お前の今後についての説明しに来た。本当はお前が落ち着いた頃合いを見計らって、この機関のことなんかも説明するつもりだったんだが、灯市の奴が勝手に進めてしまってたな」

「まあ、その方が俺の手間は省けてありがたいんだが」

佐治はぼそりと付け足した。

「…これからのことなら、あらかた支部長さんと市村に聞きました。この機関の機密を守るために家に帰してくれないこと、生活費がかかるから機関で雑用でもやって働くこと、ですよな？」

隼也は佐治の顔を見ずに、うつむき加減で言った。

「まー、そんなところだな。しかし、準太とはもう仲良くなったか。さすがだな、あいつ」

「…用事が終わったなら、さっさと帰ってください」
そう言うと、先程座っていた自分の席に戻ろうとする。

「ちよつと、シユン！佐治ちゃんに向かって…」

佐治への無礼な態度に憤慨した島ヶ峰が声を上げる。

「っ！」

途端、隼也は立ち止まった。

「その態度は…」

「…な」

「？」

島ヶ峰の言葉をさえぎり、隼也がつぶやいた。か細く、聞き取れないほどの声で。島ヶ峰は眉間に皺を寄せた。

島ヶ峰たちの方を振り返らず、少年は肩を小さく震わせていた。こぶしは固く握られている。

「シユン、どうし…」

その刹那、

「シユンって呼ぶな！」

それは、広いとはいえない空間中に響き渡った。

冷たい瞳をした少女の瞼は、少しだけ驚いたように開かれていた。

「ど…うして」

カーテンが閉め切られている薄暗い部屋の一角。草刈直人はひどく動揺していた。

今日は、あるバンドのファンサイトに設置されているチャットで知り合った人間と初めて会う日だった。顔を合わせた当初は派手な髪の色に圧倒されたが、話してみると意外と馬が合った。しかも、普段、家に籠もっていたため、久しぶりに接する女の子に少し気分が高騰していた。バンドのプレミアムCDジャケットを持っていると言ったら、「見たい」と家へ付いてきたため、有頂天になっていた。

なのに…。

草刈直人は負傷した腕を抱き寄せ、蹲っていた。息が荒い。

「ごめんねー、一発で殺してやりたかったけど。君、逃げるんだもん。その反射神経、他のところで活かせていたら、今頃、タダの引きこもりじゃなかったんじゃない？」

全然悪びれていないような声調で彼女は言う。手には血の滴る一本の剣。

何でこんなことになった！？何が良くなかった！？せつかく、不登校だったおかげで、自分が通っていた学校の凄惨な事故から、逃れることができたと思っただのに！！自分は幸運だと思っただけでよかったのに！！

「大丈夫。今、下の階にいるお母さんも、君を始末したら、君のところへ逝かせてあげるよ。君みたいなやつを何ともできない人間なんてたかが知れてるしね」

表情はにこやかなまま、赤髪の少女が近づいてくる。

「もしかしたらあの世であえるかもしれないね」

「なんでこんなこと……」

直人は身体を震わせながら彼女を見上げる。

少女は、目の前の少年を数秒見つめ、言った。穏やかに。

「死後の世界があれば、の話だけどね」

少年の質問に答えないうまま、返り血を浴びた彼女は部屋を出る。そして、チャックの上がりきったジャージの上着のポケットから白い携帯を取り出す。

「なおなおが終わったから、この学校の残りはシюнちゃんだけか……」

独り言を言いながら、指を動かし、携帯のアドレスから「草刈直人」を「削除」する。残る「高遠隼也」。

「また、会おうね。シюнちゃん。しばらくかかるけど待っていて」
携帯を、顎を使って折たたみ、その流れでそれに口付けをする。

「絶対、殺しに行くから」

佐屋宗智生はゆっくりと階段を下りていき、包丁を使う音のする台

所へと向かっていった。

ヒカリナキ？

「で？その後どうしたの？」

段ボール箱から食器を取り出しながら市村準太は目の前で衣類を丁寧に畳む少年に聞いた。

「…謝ったよ。向こうに非があるわけじゃないってことはわかってたから」

眉間に皺をよせながら気まずそうに、準也は言う。畳み終えた衣類を並べつつ。

「おお、準也君って、たまに客観的に物事を捉えられそうだよな。えらい、えらい」

効果音をつけるとしたら「へらへら」とした表情で準太は笑った。

「…今までは、自分は理不屈な事はしないって思っていたけど…」
準也はため息をついた。

「それって恥ずかしいうぬぼれだったよな…」

「え…つと…」

庶務部 A にて。AM 10:57。島ヶ峰が鎮まった空間をどうにかしようと何かしゃべろうとする。その顔は状況の気まずさに引きつった笑みを浮かべていた。

「…」

少年は、思わず怒鳴ってしまった自分の行動の愚かしさに気づいた。

「すつ、すいません。俺、睡眠不足で、ちょっとイライラしていた…」

慌てて後ろを振り向き島ヶ峰に謝る準也。

「…！ああ、そうよね！色々最近大変だったみたいだし。後一時間でお昼だから、早めに行ってきたいいわよお。というか、今日は早引きしたら？部屋の片づけもあるだろうし」

何かを察知したのか、これ以上の気まずい状況に陥らないように

島ヶ峰が退室を促した。隼はその配慮に申し訳ないと思ったのか、小さく「はい」と呟き、顔を下に向けた状態で、部屋を出た。

部屋に残された三名。銀髪の少女は、いつの間にかモニタに眼を戻して、作業を進めていた。

「思春期って難しいわね…」

島ヶ峰はやれやれといった様子で、隼が出たといった廊下を眺めながら、ため息をつく。

「あいつ、帰って良かったのか？」

佐治もまた、少年が去っていった廊下を無表情のまま見つめていた。

「庶務部（じむぶ）が有っても無くてもいいようなところだって知ってるでしょお。…それより佐治ちゃん」

視線を廊下に向けたまま、切り出す。

「どうした」

男も廊下を見たままの状態です。

「用事って高遠隼也への確認だけ？まさか、それだけの用事であなながこんなつまらないところまで来るとは思えないわー。佐治ちゃんはそのようなキャラじゃないもの」

「ほう、俺が来た理由までわかるのか」

佐治は島ヶ峰の方を見た。佐治の言葉を聞いた島ヶ峰もまた、彼を見つめ直す。

「女の勘よ。…デートのお誘いなら嬉しいんだけど」

「それで、昼飯も食べないで寮に直帰したと」

準太は茶碗を部屋に備え付けの棚に閉まっている。その様子は、子供が無邪気にパズルピースを当てはめていく様子にどこか似ていた。

「よく寮の場所が分かったね」

「…そこら辺にいた人に教えてもらった」

さすがに、建物の構造も理解できていない状況で、第六感だけで目的地に着くには無理がある。

「寮が仕事場に繋がっているって便利だよな」

隼也の周りにはいつの間にか、畳まれた衣類の山でいっぱいになっていた。その中でおも黙々と衣類を畳み続ける隼也。

「まあ、色々な緊急事態に備えてっことも考えられてるけどね。現に、部屋割は部署ごとにまとめられているし」

「へえ……」

隼也は、準太の言葉に、あえて何も言わない様子だった。

「しかし」

段ボールから取り出し対象を眺めながら隼也が言う。

「こんなに、服やら食器やら生活用品をもらっていいものなのかな？」

今、隼也がいる部屋にある衣服、食器、洗面道具、その他生活用品は全て、機関から支給されたものであった。電子レンジ、テレビ、トイレ、風呂など、およそ生活していくに十分な要素は部屋に備え付けられている。設備はホテルのスイートルーム並み、それに部屋自体も汚くはない。快適に暮らしていけそうだ。

「いいの、いいの。こういう状況に隼也君を追い込んだのには観保守の責任もあるんだから。最低限の待遇は保証してもらわないと陽気な声で準太が言う。自分も同じ境遇なのに、申し訳なさなど微塵も感じさせない。

「それに、観保守は国から結構な額の資金をもらってるらしいよ」

「……どうりで、景気が一向に回復しないと」

「それだけ、情報って言うモノは時に致命的になるってことだよ。そう言い終えると、準太は今まで食器を整理していた棚の扉を思いきり閉めた。

「うん、あとはその衣服を収納ケースに入れるだけかな」

衣類の山に囲まれた少年の様子を見ながら言った。

「あ、後は俺が片付けとくよ。悪かったな、仕事終わった後に手伝えちゃって」

隼也は一旦、衣服を畳んでいた手を休ませ、準太に詫びを入れる。

「いいの、いいの。俺が勝手に隼也君の部屋を引越しの手伝いのために訪れただけだし」

眼の前にいる少年に、にこやかな笑顔で手を遠慮がちに振りながら、彼は答えた。そして、準太はゆっくりと語りかけた。

「ねえ、隼也君」

「？何だ」

「島ヶ峰さんに『シユン』って呼ばれて、君は頭に血が昇ってしまつたと言っていたけど……」

ピクリ、隼也の肩が僅かに動いた。

「それが何故なのか、君は理解している？」

じ……っと、隼也を見つめる準太。その目は穏やかだ。

数秒、静けさが部屋を支配する。

「……」

「……俺は、自分の気持ちと向き合えないほど、愚かじゃないよ」
眼を、逸らさず。まっすぐに。隼也は準太を見据えたまま、はつきりと言った。

「……そうか。なら、大丈夫」

隼也の発言を聞き、安心したように準太は口を緩めた。

「市村……」

「もう、一人で片付けられるみたいだから、俺は部屋に戻るね」

準太が壁にかけられている時計を見ながら言った。時計の針は九時を回っている。

「あ、ありがとう……」

立ち上がり、世話になった青年を見送ろうとする隼也。準太がドアのノブを握る。

「何かあつたら、俺の部屋に気軽においで。同じ階だし。これ、部屋番号と内線の番号」

そう言いながら、準太は白い紙きれを隼也に渡す。おそらく、この部屋を訪れる前に、用意していたのだろう。

「サンキユ」

紙きれを手に取りながら、隼也がまた礼を言った。

「隼也君」

ドアを開けながら準太が声をかける。

「人間は愚かなものだよ」

隼也の方を再び向き直りながら、青年は言う。表情は微笑んだまま。
「だけど、それを自覚して、それと戦うことはできる。それに挑戦し続ける限り、君は強くなれるよ」

準太の言葉に対して、隼也は黙ったまま、何も言わなかった。ただ、準太を見つめていた。

そして、準太は、自分の眼前にいる少年の様子を見て、何か、満足したように退室していった。

「おやすみ、隼也君」

「ふうっ……」

畳んだ服を一通りしまい終え、隼也は息づいた。時刻は午後九時半。まだ、面白そうなテレビ番組も放送しているだろう。彼は卓袱台の上にあったりリモコンに手をかけ、…止めた。リモコンを卓袱台の上に戻し、ドアの方に向かうと、壁にあったボタンを押した。

わずかな機械音が聞こえる中、彼はドアの傍で、ただ、じっと、立っていた。

そして、部屋の照明が消えた。

ここは地下。月明かりなどは、差し込まない。部屋は闇に包まれる。そのような状態で、ベッドへ向かうといった移動の行為は危険であるから、時間差で電灯が切れるように仕組まれているのだろう。しかし、少年は闇の中、ただ、じっと、立っていた。そして、腕を伸ばし、手で何かを探した。だが、やがて、何も掴めないことが解かると、少年は腕をだらりとさせ、そのまま、その場に座り込ん

だ。

『あなた、悲劇の主人公になったつもり？』

「…違う、そんなんじゃない」

頭を抱えても、そこに光が入ることは、ない。

ヒカリナキ？

「…ここは、何処だ」

少年は、独り言を呟く。扉が規則正しく並ぶ白い壁、奥へと続いている果てが見えない長い廊下。周りに人影は見当たらない。

気まずさから逃げるように飛び出したのは良いものの、高遠隼也は途方に暮れていた。それもそのはず。彼は、この施設の構造を把握していない。そのための時間も自由も—ここ（観保守）に来てから与えられていないのだから。

何時間歩き続けたのだろう。彼の呼吸は、少なからず乱れていた。一般の健康な男子なら、数十分歩いただけではここまで呼吸を荒くはしないだろう。

「ふー…」

隼也はため息を吐くと、壁に寄りかかるようにしてその場にしゃがみこんだ。そして、先程の自分の愚行を思い起こして、悔いているのか、頭を少しだけ掻き毟る。

その時だった。誰もいないはずの廊下に、聞き取れるか聞き取れないかくらいの音楽が流れていることに少年は気付いた。

「…?」

少年は立ち上がり、辺りを見回す。音の発信元の詳細は解からないが、この廊下に並んでいる扉のうちの一つ、その向こう側から音が漏れているようだった。

隼也は歩を進めた。曲が流れているということは、それを聞いている人が近くにいる可能性がある。上手くいけば、施設内の寮の位置について何か情報を得られるかもしれない。

慎重に耳をそばだてながら、廊下を歩く。時折、扉を開き、室内に人がいないかどうか確かめながら。

開かれた戸の向こう側には狭いミーティングルームのような部屋

や、段ボール箱がたくさん積み重ねられている部屋などがあつた。中には開けようとしても鍵がかかっている部屋もあつた。そのような場合、少年は耳を戸に密着させ、物音がするかどうか確かめた。そして、何も聞こえないとわかると、そこから離れ、音源探しを再開した。

規則正しく扉が並んでいた廊下は、いつしか不規則にその壁を飾るようになった。次第に、明確になってくる穏やかな音は、誰もいない廊下には逆に不気味である。

やがて、高遠隼也は一つの戸の前で立ち止まった。廊下の突き当たりである、飾り気のない扉。少年はノブを回し、ゆっくりと、それを開けた。

彼の目の前に広がる景色は少し予想外なものだった。簡素な扉には似つかわしくない、淡い青の光で所々照らされている広い空間。ドアから座席が下に向かって階段状に並び、さらに、前方にはステージが設置されていた。まるで、小規模の映画館のようだ。

薄暗い世界に響き渡る穏やかで優しげな音楽。少年は誰かいないか、目を凝らして周囲を見渡した。

すると、空間の中央あたりの席から僅かに出ている頭部を発見した。流れている音楽のせい、頭の持ち主は入室してきた少年に気づかないようだ。

少年は静かに、階段を下りていき、人物に近づいていく。このような、ある種完成された世界に侵入するのは気が引けるのだろう。隼也の足取りは、一步一步が音をたてないように、慎重に進められていく。

「あの…すいません」

ようやく人陰の後ろの座席に辿り着くと、隼也は遠慮がちに、中腰になりながら声を掛けた。

瞬間、人物の正体を明確に捉えた少年はその瞳に驚きを映した。

「…！」

それは振り向いた相手も同じだったようで、自分が向かい合っている少年の姿を凝視したまま、眉間に少し皺をよせた。しかし、予想外の登場人物に何も言えないようであった。

通常的环境ならば遠目でもわかる、その特徴的な髪色に気づかなかったのは、少年の感覚が空間の薄暗さのせいで麻痺していたからかもしれない。

しかし、今、彼と相手の間にはそのような事情など関係無かった。

そう、高遠隼也と藍津柚季の間には。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6361k/>

紅蓮の宝戒

2012年1月2日01時48分発行